

山梨県中央道埋蔵文化財 包蔵地発掘調査報告書

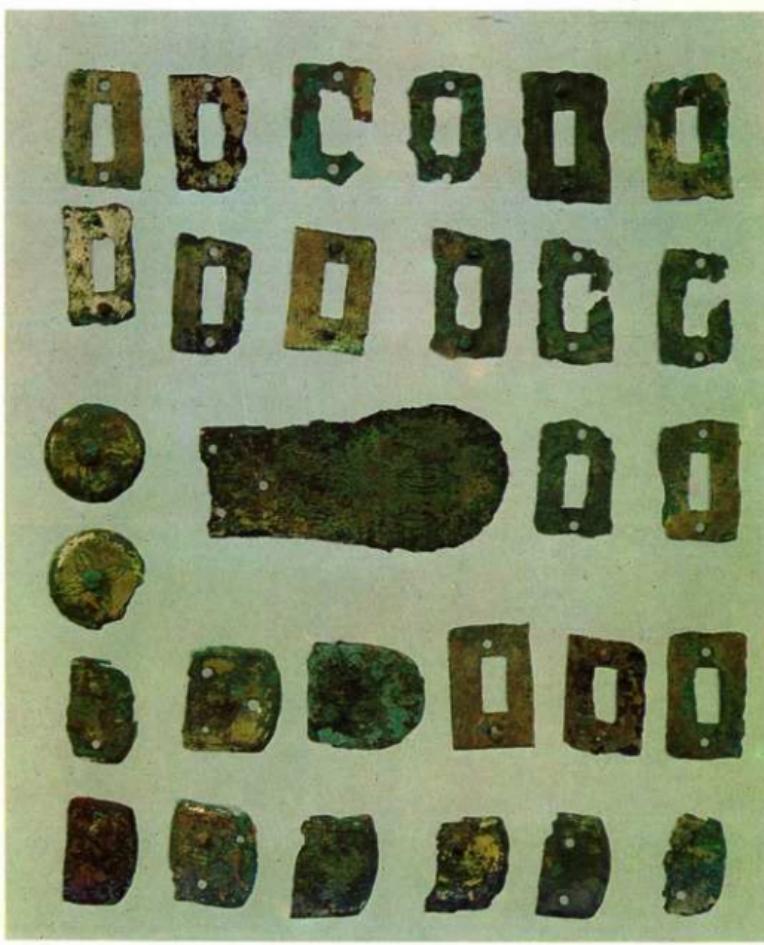
—北巨摩郡双葉町地内2—
—中巨摩郡竜王町地内—

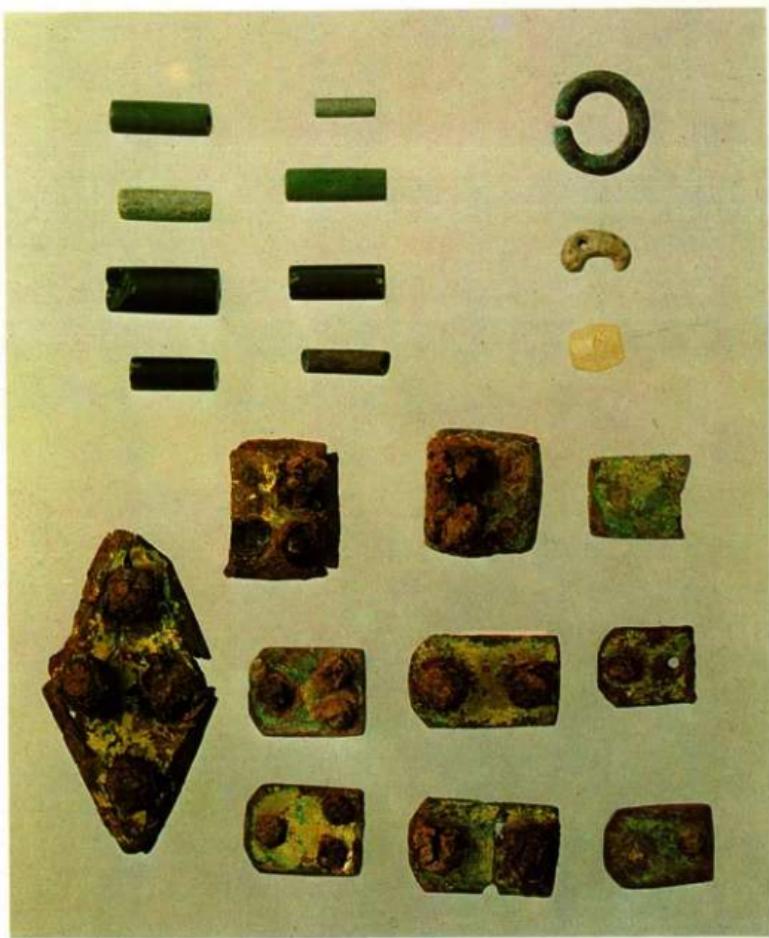
1979.3

山梨県教育委員会
日本道路公団東京第二建設局

正誤表

| 頁 | 行 | 誤 | 正 |
|----|-------|-----------|-------------|
| 3 | 2 | 平板測量 | 平板測量 |
| 10 | 22 | 横口積み | 横口積み |
| 20 | 26 | 鉄鑑 | 鉄鑑 |
| 21 | 3 | 貫通 | 貫通 |
| 32 | 18 | 口様(推定) 器高 | 口径(推定) 14cm |
| 〃 | 18~19 | 器高33.9cm | 器高 3.9 cm |
| 〃 | 33 | (推〇) | (推定) |
| 52 | 4 | 石例 | 石列 |
| 〃 | 19 | 行なわれたものは | 行なわれたもので |
| 53 | 12 | 石積に | 石積の |
| 〃 | 21 | 前底部は | 前底部の |
| 58 | 22 | 会法13号 | 会誌13号 |
| 〃 | 30 | 遺物説明 | 遺物説明 |
| 〃 | 31 | 入口部のもや | 入口部のものや |





山梨県中央道埋蔵文化財 包蔵地発掘調査報告書

— 北巨摩郡双葉町地内 2 —
— 中巨摩郡竜王町地内 —

1979. 3

山梨県教育委員会
日本道路公団東京第二建設局

序 文

昭和52年度中央自動車道用地内埋蔵文化財包蔵地発掘調査の一環として、北巨摩郡双葉町及び中巨摩郡竜王町地内の古墳の計4基の調査が行なわれた。

この地区は甲府盆地西側にゆるやかにのびた赤坂台地上の、いわゆる赤坂台古墳群の二ツ塚支群と呼称していたもので、昨年の調査に統いて実施した。古来よりこの台地上には無数の古墳が存在したことが甲斐国誌によっても知られていたが、江戸時代以来の開墾によって、そのほとんどが焼滅してしまい、今は数える位しか残存していない。その有力な古墳群が、この大工事によって消滅するのは、文化財の活用上、実に残念なことではありますけれども、この様な学術調査を経て、広く県民の皆様方や、研究者の方々に報告できる冊子が刊行されたことは、感慨のいたりであります。

この報告が今後の地域研究や学習に資すること大なるを願うとともに、調査、整理、報告書作成に参加された皆様をはじめ、種々のご協力をいただいた、双葉町、竜王町の教育委員会、地元土地所有者、道路公団甲府工事各務所の皆様に厚く御礼申し上げます。

昭和54年3月1日

山梨県教育委員会

教育長 小林虎郎

凡　　例

1. 本報告書は、昭和52年度に日本道路公団東京第二建設局から委託されて山梨県教育委員会が実施した、北巨摩郡双葉町所在の二ッ塚2号墳、中巨摩郡竜王町所在のふたん塚、竜王2号墳、竜王3号墳の報告書である。
2. 本報告書作成の経費は、昭和53年度に日本道路公団東京第二建設局と山梨県教育委員会の契約による。
3. 発掘調査の担当及び本書の編集は文化財主事　末木　健が行なった。
4. 遺物整理、製図、トレースは、末木　健、新津　健、伊藤慎彦、米田明訓、長沢宏昌が行なった。
5. 原稿執筆はそれぞれ文末に文責者名を記入してあるが、統一のとれていない場合の責は編集者にある。
6. 遺物、図面は県文化課に保存してある。

目 次

| | |
|---------------------|----|
| 第1章 序 説..... | 1 |
| 第1節 調査事務..... | 1 |
| 1. 発掘調査事務経過..... | 1 |
| 2. 調査団組織..... | 1 |
| 3. 調査日誌..... | 1 |
| 4. 測量成果..... | 3 |
| 第2節 周辺の概要..... | 3 |
| 1. 地理的環境と歴史的背景..... | 3 |
| 第2章 遺跡の概要..... | 7 |
| 第1節 竜王2号墳..... | 7 |
| 1. 墳丘、石室構造..... | 7 |
| 2. 出土遺物..... | 15 |
| 第2節 竜王3号墳..... | 21 |
| 1. 墳丘、石室構造..... | 21 |
| 2. 出土遺物..... | 29 |
| 第3節 ふたん塚古墳..... | 45 |
| 第4節 ニッ塚2号墳..... | 45 |
| 第3章 考 察..... | 47 |
| 第1節 石室構造について..... | 47 |
| 第2節 出土遺物について..... | 58 |
| 第3節 出土人骨について..... | 59 |
| おわりに..... | 63 |

挿 図 目 次

| | | | |
|--------------------------|-----|-----------------------|-------|
| 第1図 遺跡位置図 | 4 | 第19図 竜王3号墳閉塞石断面図 | 28 |
| 第2図 ニッ塚古墳群全体図 | 5,6 | 第20図 遺物出土位置図 | |
| 第3図 竜王2号墳現況平面図 | 8 | ①土器類 ②人骨 | 30 |
| 第4図 竜王2号墳全体図 | 9 | 第21図 遺物出土位置図 | |
| 第5図 竜王2号墳石室平面図 | 11 | ③玉類 ④鉄製品 | 31 |
| 第6図 竜王2号墳石室展開図 | 12 | 第22図 遺物 1)須恵器 | 33 |
| 第7図 竜王2号墳石室断面図、 墳丘土層図 | 13 | 第23図 " (2)土師器 | 34 |
| 第8図 竜王2号墳墳丘断面図 | 14 | 第24図 " (3)金環、馬具飾金具、武具 | 36 |
| 第9図 竜王2号墳遺物出土位置図 | 15 | 第25図 " (4)武具 | 37 |
| 第10図 竜王2号墳出土遺物(1) | 16 | 第26図 " (5)玉類① | 38 |
| 第11図 " (2) | 17 | 第27図 " (6) " ② | 40 |
| 第12図 " (3) | 18 | 第28図 " (7) " ③ | 41 |
| 第13図 " (4) | 19 | 第29図 " (8) " ④ | 42 |
| 第14図 竜王3号墳現況平面図 | 22 | 第30図 ふたん塚現況平面図 | 46 |
| 第15図 竜王3号墳全体図 | 23 | 第31図 ニッ塚2号墳現況平面図 | 48 |
| 第16図 竜王3号墳石室平面図 | 25 | 第32図 " 土層図 | 49,50 |
| 第17図 竜王3号墳石室展開図 | 26 | 第33図 ニッ塚1号墳石室展開図 | 55 |
| 第18図 竜王3号墳土層断面図 | 27 | 第34図 从業2号墳石室展開図 | 56 |

表 目 次

| | | |
|-----|----------|----|
| 第1表 | 測量成果表 | 3 |
| 第2表 | 竜王3号墳玉類① | 43 |
| 第3表 | " ② | 44 |

図 版 目 次

| | | | |
|------|--------------------------------|------|-----------------------------------|
| 図版1 | 赤坂台二ツ塚古墳群航空写真 | 図版15 | ①竜王3号墳奥壁正面 ②竜王3号墳閉塞石内側正面 |
| 図版2 | ①竜王2号墳発掘前現況 ②竜王2号墳石室全景 | 図版16 | ①竜王3号墳石室一部 ②竜王3号墳石室閉塞石除去状態 |
| 図版3 | 竜王2号墳作業風景 | 図版17 | ①竜王3号墳東側壁 ②竜王3号墳西側壁 |
| 図版4 | ①竜王2号墳墳丘全景 ②竜王2号墳石室正面 | 図版18 | ①竜王3号墳東側壁裏込 ②竜王3号墳西側セクション |
| 図版5 | ①竜王2号墳東側壁 ②竜王2号墳西側壁 | 図版19 | 竜王3号墳作業風景 |
| 図版6 | ①竜王2号墳奥壁 ②竜王2号墳閉塞石内側正面 | 図版20 | 竜王3号墳人骨取上げ、出土状態 |
| 図版7 | 竜王2号墳奥壁セクション | 図版21 | 竜王3号墳遺物出土状態① |
| 図版8 | ②竜王2号墳東側セクション ①竜王2号墳西側セクション | 図版22 | 竜王3号墳遺物出土状態② |
| 図版9 | ②竜王2号墳側壁裏込石 | 図版23 | 竜王3号墳出土遺物① |
| 図版10 | 竜王2号墳遺物出土状態① | 図版24 | " ② |
| 図版11 | 竜王2号墳遺物出土状態② | 図版25 | " ③ |
| 図版12 | 竜王2号墳出土遺物② | 図版26 | ①二ツ塚2号墳調査前現況 ②トレンチ設定 |
| 図版13 | ①竜王3号墳発掘調査前現況 ②竜王3号墳石室全景 | 図版27 | ①二ツ塚2号墳Aトレンチ北側土層 ② " Bトレンチ東側土層 |
| 図版14 | ①竜王3号墳発掘風景 ②竜王3号墳石室全景 | 図版28 | ① " Cトレンチ東側石組 ②調査風景 |

第1章 序 説

第1節 調査事務

1. 発掘調査事務経過

- 52年6月14日 県教育委員会より道路公団あてに昭和52年度の発掘調査計画書を提出する。
- 52年5月26日 文化庁に竜王2号、3号墳、ふたん塚、二ッ塚2号墳の発掘届を提出する。
- 6月15日 道路公団より教育委員会へ契約の協議書が送付される。
- 6月16日 教育委員会より契約書を道路公団に返送する。
- 9月6日 二ッ塚2号、竜王2号、3号墳の遺物発見届を甲府南警察署に通知する。
- 53年1月12日 契約変更を行なう。
- 1月18日 道路公団あてに支払請求書を提出する。
- 3月31日 道路公団あてに精算報告書を提出する。
- 4月17日 道路公団より精算報告の了解通知が県教育委員会に通知される。

2. 調査団組織

調査主体 山梨県教育委員会

調査团长 井出 佐重（山梨県遺跡調査団長）

調査担当者 末木 健（県文化財主事）

調 勤 兼 収本 美夫（日本考古学協会員）

伊藤 恒彦（日本大学文理学部卒）

米田 明訓（明治大学大学院）

補 助 員 井川達雄、村木 功、渡辺儀訓（明治大学）佐野勝広、五十嵐秀（国士館大学）
山本茂樹、黒田 正、（日本大学）藤田 豊、石井忠行（駒沢大学）星野真乃
(立正大学) 鈴木正彦(明星大学) 長沢宏昌(広島大学) 成川清隆(城西大学)

作 業 員 広瀬 修、岡野明美智、石田真功、河野龍太郎、諸角俊明、高木守夫、渡辺順、
占屋 進、清水春雄、清水良次、岩間信華、望月勝彦、藤田美智雄、秋山智治、
横内達也、水野裕一、守屋由美子、長坂江里、土橋友彦、片田和広、高尾 進、
深見志津子、松本正一、米山克巳、伊藤博明、山中 功、山田 浩、小田切年
男、村松浩二、齊藤 栄、横森 升、保坂 剛、保坂 章、温品欣之、田中孝
幸、長嶋俊哉。

3. 発掘調査日誌

a 竜王2号墳

52年7月25日～31日、墳丘の立木を撤去。8月1日セクションベルトの設定。写真撮影。墳丘は削平されて天井は残存せず。2日、北東奥壁より右回りで1～6区に墳丘を分け、表土の

除去を行なう。石室の側壁一部が確認される。3日墳丘の表土剥ぎによって、墳丘中段に中疊が回ることが分る。石室内の掘り下げ。4日墳丘及び石室内の調査。墳丘スソ部に石列がめぐる。5、6日セクショントレンチの掘り下げ。10日墳丘上の列石の実測。前庭部の確認。閉塞石の一部を発見。11日墳丘及び石室内の清掃。12日写真撮影。15~16日トレンチ掘り下げ。20日石室平面図作成開始。21日平面図作成。トレンチ掘り下げ。22~24日、前庭部付近より須恵器片が多量に出土。平面図作成。25、26日、セクションの為、裏込石を切る。石室展開図作成に入る。南北トレンチ完了。27日、トレンチ掘り下げ。石室床平面、展開図の作成。29日、石室展開図、セクション図作成。31日墳丘のセクション、閉塞石の実測。写真。9月1日、墳丘の写真撮影。床礫を除去する。2日、作業終了。

b 鬼王3号墳

7月12日、墳丘の立木除去、雑草の下刈り。13日、墳丘及びその周辺の清掃。トレンチ設定。表土剥ぎ。15日石室の確認。墳丘と石室の掘り下げ。16~19日前日と同様、石室と墳丘の掘り下げを行う。石室の天井石は完全に存在せず、側壁も相当取り去られている。墳丘を奥壁西側から南へABCとし東側は奥壁からDEFの区を設定した。墳丘下より黒色上層があり、これが旧表土と考えられた。20日D区南セクション。閉塞石検出。土師質土器、金環、鉄鎌等が出土。石室内の掘り下げ。21日間仕切石が奥側壁から検出され、遺物も出土する。22日、人骨等が奥壁部及び入口部で発見される。25日石室内の清掃。ガラス玉、土製練玉等が多数出土。26日セクション実測。石室内清掃。27日、遺物の写真撮影。28日、人骨の実測。信州大学西沢教授に来跡いただき人骨を取り上げる。29日石室平面実測図。30日遺物の写真及び遺物回収、裏込石の清掃。8月1日。古墳の周辺にグリッドを設定。2日石室全体写真。石室にやり方を組む。3~5日、石室平面図の実測。6日裏込石の一部撤去。石室正面図。8日裏込石セクション。11日石室清掃。12日石室内展開図の作成開始。15日、全体図の平板測量。写真撮影。16日石室内エレベーション。20日、閉塞石の実測及び側壁の写真。22日、前庭部の掘り下げを行ない、正面石積状態を露出させる。23日前庭部にセクション実測用のトレンチを入れる。24~25日石室内の敷石撤去。終了。

c ふたん塚古墳

52年8月1日。雑草の除去。2日、トレンチラインの設定。掘り下げの開始。3~6日掘り下げを行なう。8~10日セクションラインの清掃。写真。作業終了。

d 二ツ塚2号墳

53年2月16日、墳丘上の桑を除去し現況写真を撮影する。南北(A)東西北側(C)東西南側(B)の各トレンチを設定する。トレンチの掘り下げを行なう。2月17日、各トレンチを掘り下げる。Cトレンチより土師質土器片が若干出土する。この段階で石室が発見されないところから古墳であるとの見解を放棄した。ただCトレンチ東側で巨石が存在しており、自然石と考えられた。18日、Bトレンチの掘り下げ。遺物なし。周溝及び根切溝等は無いことが分る。

A B C 各トレンチの振り下げ。20~21日、地山までの掘り下げ。セクション図作成。セクションの写真。22日、A B C トレンチ交差部の掘り下げ。24日、墳丘の半版測量。25日、写真撮影し、作業を終了する。26日、器材運搬。

4. 測量成果について

この測量はコクサイ航空測量株式会社に委託して得たものである。

| 点名 | X | Y | H | 備考 |
|--------------|-------------|-------------|-------------|---------|
| 二ツ塚2号墳 A6.4 | -35 985・676 | + 1228・086 | 342・034 | 杭上 |
| | | | 341・87 | 杭下 |
| | A6.4 A | -35 985・676 | + 1215・824 | 341・108 |
| A6.4 B | -35 985・676 | + 1240・657 | 340・172 | |
| | A6.7 | -36 145・386 | + 1 375・702 | 330・801 |
| 竜王2号墳 A6.7 A | -36 145・386 | + 1 387・595 | 330・332 | |
| | A6.7 B | -36 145・386 | + 1 363・205 | 329・086 |
| 竜王3号墳 A6.8 | -36 165・879 | + 1 21・212 | 328・317 | |
| | A6.8 A | -36 165・879 | + 1 411・594 | 327・571 |
| | A6.8 B | -36 165・879 | + 1 431・829 | 326・404 |

表 1

第2節 周辺の概要

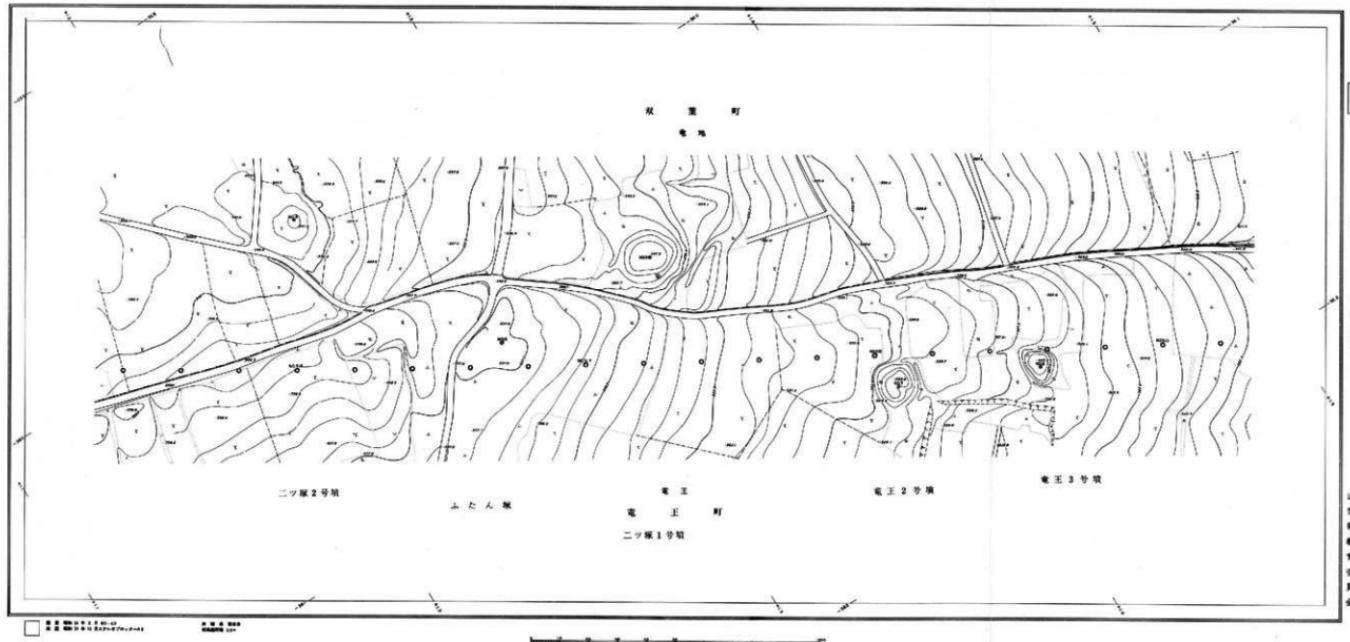
地理的環境と歴史的背景

この点については昨年度の報告「山梨県中央道埋蔵文化財発掘調査報告書（双葉町地内1）」に詳述したので略記する。

国鉄中央線竜王駅北西側、南に長くのびた丘が赤坂台地と呼ばれ、この上には古墳群が幾つか存在するが、今回調査した古墳群も、赤坂台古墳群中の二ツ塚支群の4基である。台地上には古墳時代の集落が発見されていないところから、古墳築造の主体者達の生活の場は、台地東、南の敷島町や、竜王町の平垣部に存在したと考えられている。特に二ツ塚支群は台地東斜面に位置しており、敷島町の中下条、大下条部落が立地する微高地上の遺跡と関連が深いと言わなければならぬ。現在でも、台地東斜面の桑畠のはとんどが敷島町居住者の土地所有となっていいるのも、まんざら無縁ではない様な気がする。



第1図 遺跡位置図 (1. 二ツ塚1号墳 2. 双葉2号墳 3. 字津谷無名墳
4. 魔王2号墳 5. 魔王3号墳 6. ふたん塚 7. 二ツ塚2号墳)



第2図 ニッ塚古墳群全体図

第2章 遺跡の概要

第1節 竜王2号墳

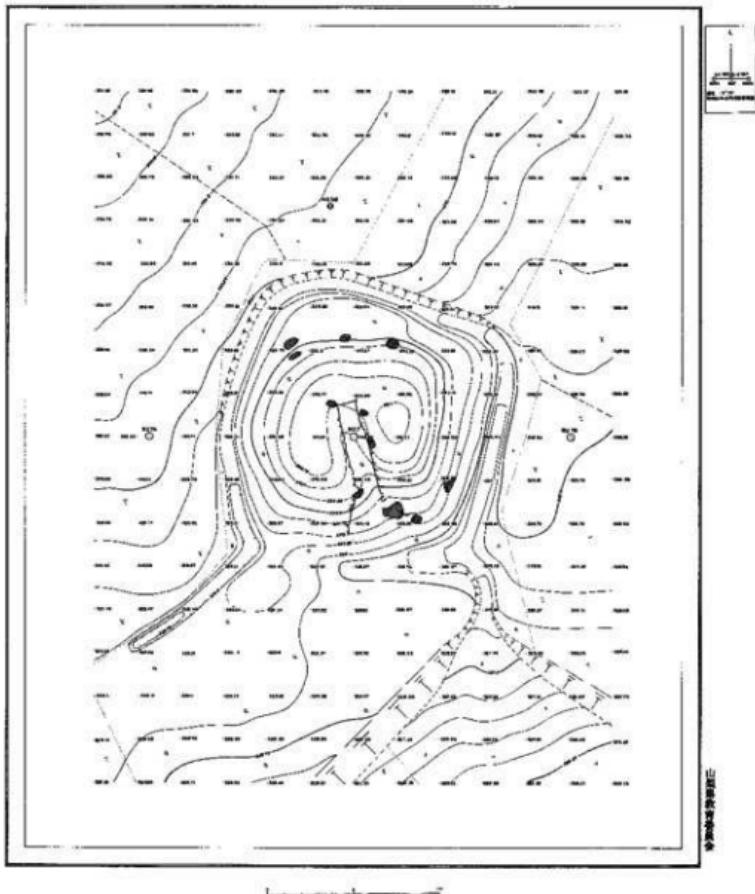
1. 墓丘、内部構造

今回調査された竜王2号墳は滋賀県大津市新町字二ツ塚1874の、標高330.8mに所在し、前年度調査された二ツ塚1号墳の南方約100mに位置する。現墳丘は蘿木に覆われ、根切り溝が裾部分を一周するように掘られている。周辺は桑畠であり、本墳も開墾を受け削平されているようであった。墳頂部には嵌込み石が散乱し、側壁も地表面に露出していた。したがって天井石はすでに流出し、現位置には存在せず、石室内には流入土が嵌込み石と共に充満しているような状態であった。

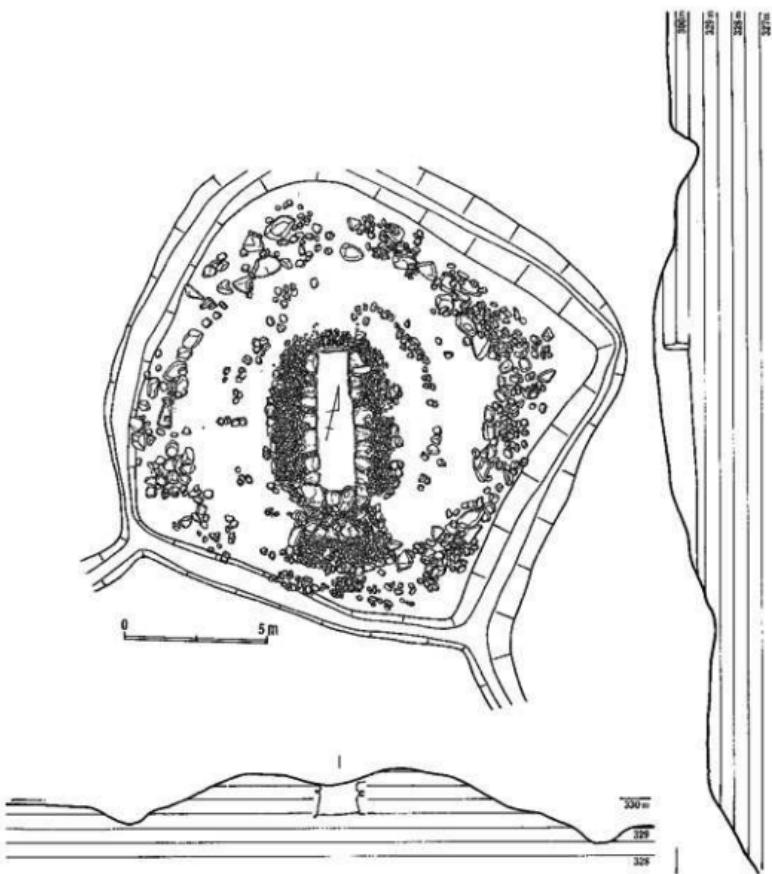
(墳丘、外部構造)

現墳丘は外径約14m、基底面からの高さ1.70mを計り、ほぼ円墳状の形状を留めている。現表土を取り去った段階で墳丘より外側列石状の石列が2本確認された。現墳丘堤部を巡る石列は非常に粗密、不揃いな状態が著しく、石材の大きさも統一的でなく、形状も列石状を呈していない。しかし、石室を中心として、墳丘をほぼ一周し、円を画くところから本墳に伴う遺構であることに誤りはないと思われる。前庭部前方部以外に設置され、東側部分は量が多く、一抱え以上の石材が内側に点々と巡り、その外側に径20cm以上の石材が無造作な状態で弧状に散乱している。西側部分は大形石材が点在することに東側と相違は認められないが、それ以外の石材の量は少ない。前庭部前方にも小形の石材が散乱していたが、地表面に露出したような状態であったため、この石列に続くものかどうかは不明である。この石列の内側にも石列が確認されており、形状は皆円形状を呈しているが流出が著しい。これも西側に比べ東側の遺存状態が良好であり、石垣状に石積みされた部分も存在していた。石材は径20~30mほどのものが使用されていた。墳丘の現状は削平され、墳頂部も低くなっている。したがってこの石列は墳丘中に存在し、墳丘内を巡るという形状であったものと思われる。この状態は古墳築造時の墳丘外側を飾る所謂墓石列石的なものとは性格を異にするものと考えられる。墳丘は旧地表面の黒色土上に石室と共に積まれており、古墳築造面を設定し、旧地表面を敲きしめて基盤を構築すると同時に、基盤周辺の削平を行ない整地している。墳丘南部では顯著で、基盤も外側石列の手前で切られており広範囲にわたり周辺を整地しているようである。この後に石室、裏込め石、墳丘を積み上げるわけであるが、丁寧な作りであったことが窺える。基盤上に石室根石を設置し、根石から少し離した位置まで敲きしめた盛土を行ない、この盛土の根石側に一抱えほどの石材を設置して、さらにこの間に嵌込み石を投入するという方法がとられ、この方法を繰り返し行なって墳丘を中ほどまで構築している。したがって石室を中心として外側に傾斜する敲きしめた墳丘が構築され、この完成前段階の墳丘を保持し、墳丘の流出を防ぐ目的で裾部分

に乱雑に石列を設置したものと思われる。さらにこの上に石室天井部、墳丘を築くわけであり、この上半部に墳丘中に存在した石列が関係するものと考えられる。それは下半部構築方法を



第3図 竜王第2号墳現況平面図



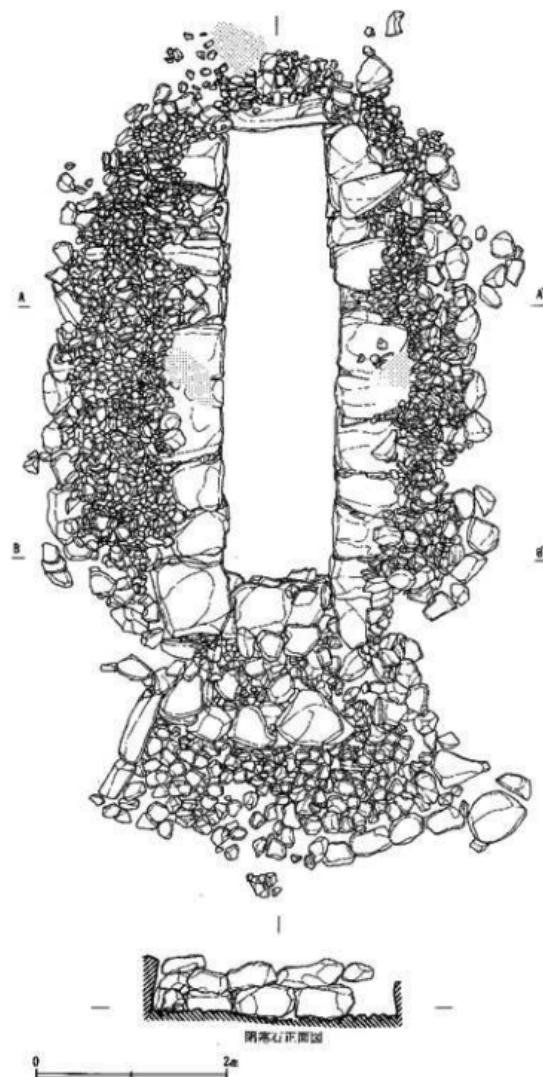
第4図 竜王2号墳全体図

取り入れながらも、敲きしめる盛土の範囲を狭めることで労力の節約を行なった結果であり、狹められた上半部の樋を堅固にするための石列であったのであろう。さらに天井部や石列を覆い隠すように盛土が行なわれたことが、外側石列を覆っていた敲きしめてない盛土から推定される。したがって墳丘に存在した石列は墳丘構造に関係し、これを保持する目的を持って設置されたものであり、さらにこれを覆う盛土がなされていることから、古墳築造時の外径、高さは現墳丘より大きくなるものと考えられる。

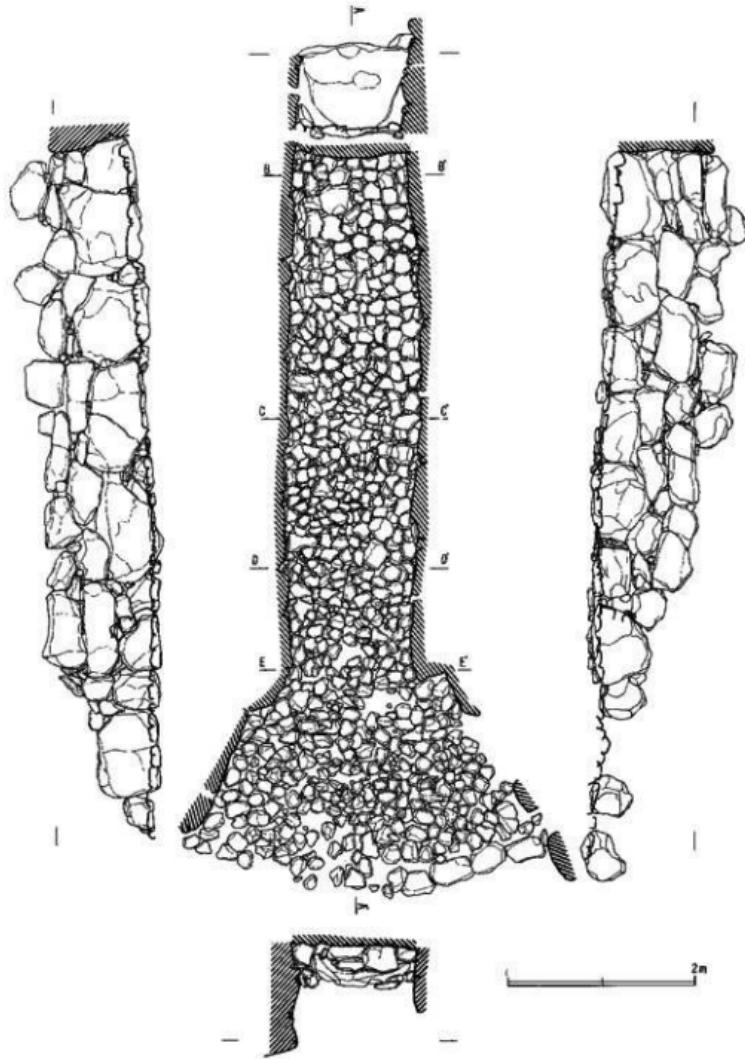
(石室 内部構造)

竜王2号墳の主体部は不整形の前庭部を伴う無袖型横穴式石室で主軸はN-12°-Wである。石室上半部は崩壊、流出しているため、天井部の形状は不明であるが、他の部分の遺存状態は比較的良好であった。石室全長は主軸で5m75、左側壁部で6m、右側壁部で5m60、閉塞石内側まででは4m80を計る。奥壁幅は1m15、羨門部で1m30、石室中央部では1m40を計り、やや胴張り状を呈する狹長な石室である。しかし石室内左側壁ラインは直線的であり、右側壁が多少ふくらむ形状であるため、築造時に意識的に胴張り状に構築したものとは考えられず、結果的な帰結であったものと思われる。側壁は天井部と同様に上半部が流出していたが、根石から3~4段の石積みが認められている。奥壁は一枚石を広口積みにして倒置し、両側壁にもたせかけるような状態であった。現存するものはこの一枚だけであるあまりにも低く、この状態で奥壁を構成していたとは考えられず、この上に数段の石積みがなされていたと思われる。右側壁は1~4段の石積みが認められ、左側壁にくらべ遺存状態は悪い。根石は奥壁に接する石から2個目までと羨門石が広口積みで、他は横口積みである。左側壁根石は奥壁から3個目までが広口積みで他は横口積みであった。左右側壁は2段目から上段にかけては横口、小口積みが併用されているが、上段になると大部分が小口積みで構築されていた。ただ3段目まで認められた左羨門石はすべて人形石材を様口積みにしており、や、特異な形状であった。側壁は持ち込み状態を示さず、ほぼ垂直に積み上げられている。さらに側石間のすき間や根石の下には石材の安定や、形状を整えるために小碑を挿入して構築されており全般的には丁寧な作りであった。前庭部は上辺幅約2m、下辺幅3m80、長さ約2mの崩れた台形状の平面形を呈している。区画石は側壁から通して石積みされており、1~3段の石積みが遺存していた。右区画石は大部分が流出しており状態等は不明であるが、遺存していた根石は小口積みで構築されていた。左区画石は根石が広口積みで2~3段目は小形の石材が小口、あるいは横口積みで、大形の石材は広口積みで構築されており、石室側壁とは構造的な差異が認められた。主体部及び前庭部床面にはすべて敷石が施されていたが状態はやや異なる。それは石室内が偏平な石材を並び重なり合う状態で設置し、さらにその上から大量の指頭大の小礫が、すき間や凹凸を緩和するために混入されていた。これに比べ閉塞石下部から前庭部にかけての敷石は、すき間が目立つ設置の仕方であり、小礫の混入も少量であった。さらに敷石の石材もゴロゴロした立方体に近い角礫を使用していた。また前庭部前方部には敷石より大形の偏平な石材が、扇形に設置

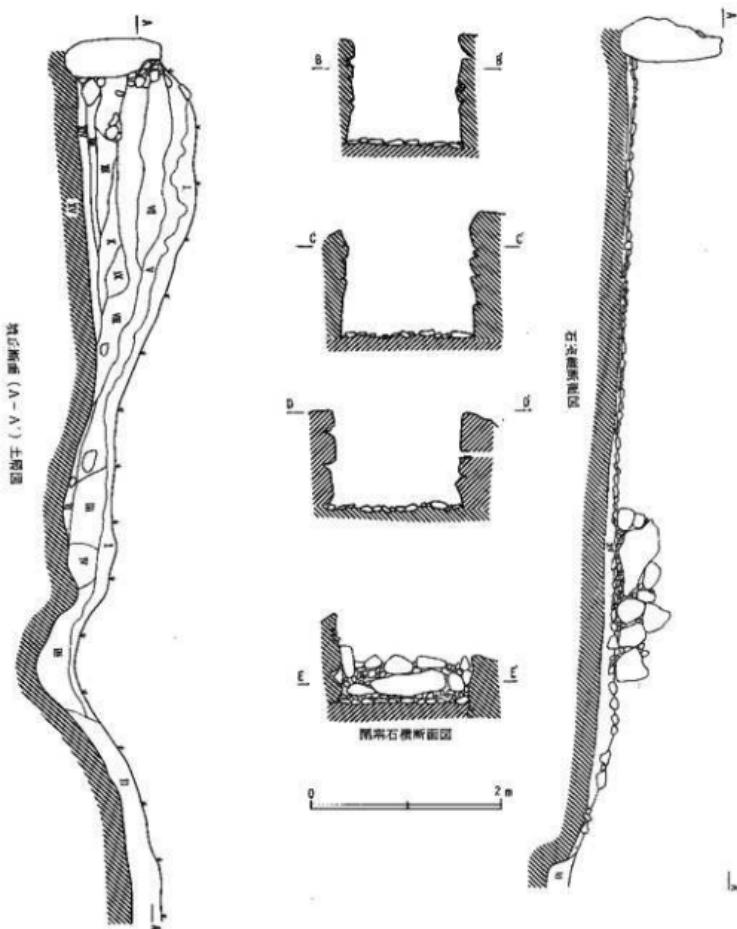
されていたようであり、右側部分が一定程度遺存していた。これは前底部敷石に区画石の他に意識的な区画を施こしたものと思われる。敷石は石室内では奥壁から閉塞石までが25cm、前底部前方までが40cmを計る傾斜が認められており、旧地表面にそった傾斜であることが想定される。閉塞石は石室と同様に崩壊、流出しており基底部が認められたに留まった。遺存していた基底部は幅1.85mを計り、1～3段の石積みが認められ、前庭、石室内側に丁寧な石積みを横口、小口積みで施こし、その間に大小さまざまな石材を投入していた。この中で拳大の礫の多いことが目についた。この閉塞石は石室狭門部を覆いかくす状態で積み上げられており、前底部中ほどまで構築されている。閉塞石が狭門との関係でどのような石積み状態であったのか興味深い。裏込め石は石室を取り巻く状態で施こされていたが、前底部区画石と奥壁の裏



第5図 竜王2号墳石室平面図

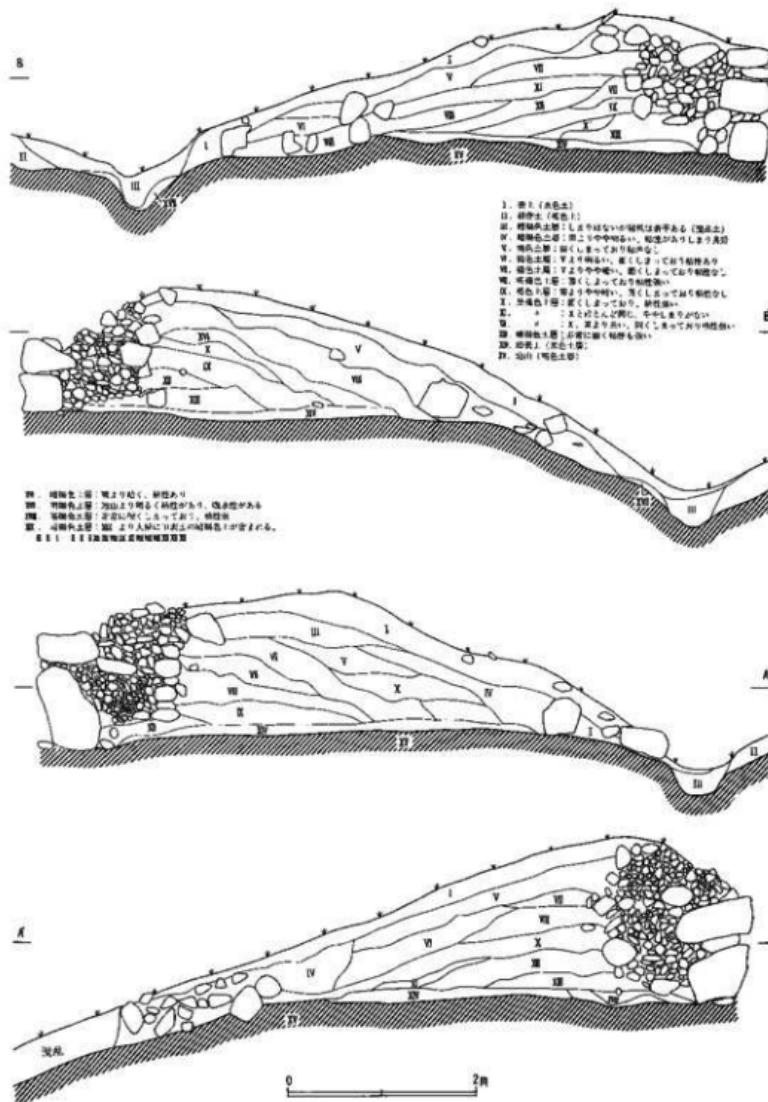


第6図 竜王2号墳石室展開図



第7図 竜王2号墳石室断面図、墳丘土層図

側には少量の裏込め石が石材保持のため施こされただけであり、側壁部分とは粗密な差が著しい。墳丘の稿でも記述したが側壁と墳丘との間、墳丘と接する部分に大形の石材を設置しており、これによって墳丘との力関係をより堅固なものにし、この間に径10~30cmほどの石材を詰め込んで裏込めを形成している。さらにこの中には一抱え以上あるものは数少なく、全体的



第8図 竜王2号墳墳丘断面図

には外済する形状を呈していた。

竜王2号墳出土遺物

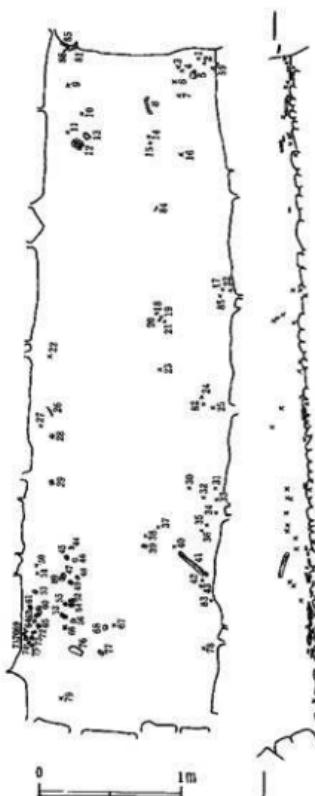
竜王2号墳から出土した遺物は土器類、飾金具、武器類、その他であるが、石室の上半分が崩壊、流出し、側壁が露出し、石室内には土石が充満した状態であったため、人為的な擾乱を受けていることが推定された。遺物の出土状態には群としてのかたよりが認められたが、飾金具類は敷石から5cm前後離れた状態で検出され、須恵器類は破片となり、10~20cmほど敷石より離れていた。さらに整理段階で奥壁に接する位置の破片と、閉塞石周辺の破片の接合関係や、同一個体と考えられる破片が、石室内と前庭部周辺に分布している状態が確認されている。したがって図示した遺物が副葬品のすべて、さらに副葬時の現位置とは考えられず、天井部崩壊時か、あるいはそれ以前に石室内が乱らされていることは間違いないことと思われる。

土器類（第10、11図）

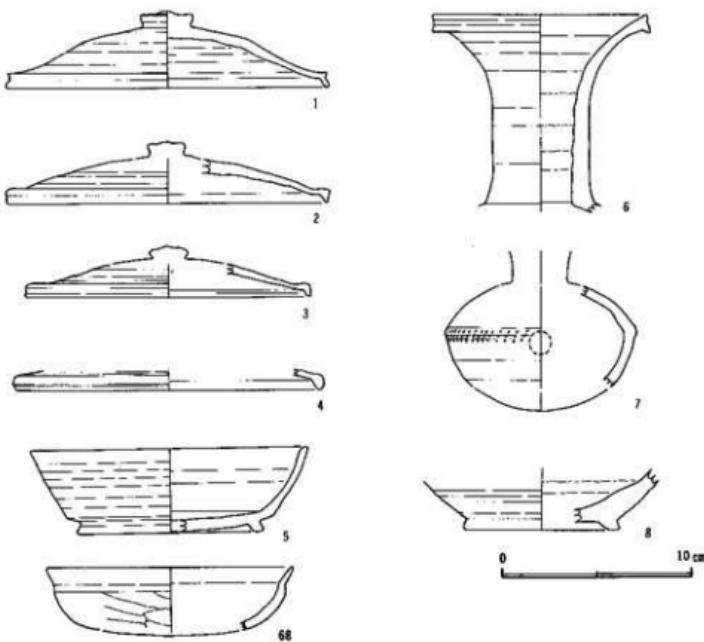
土器類は須恵器、土師器が認められたが、量的には須恵器の量が多い。しかし検出されたものは石室内、前庭部周辺、及び墳丘表土内で、すべて小破片に破壊された状態であった。したがって図示したもののは復元実測のものが大部分を占める。

須恵器（第10図1~8、第11図9~19）

第10図1~4は杯蓋で、すべて前庭部西側の現墳丘裾部から、表土層を除去した段階で出土したものである。1は口径17cm、器高4.1cmを計り、頂部には偏平な擬似宝珠つまみが付き、器高が高く頂部がふくらむ形狀のものである。返りは「く」の字に折れ曲り、浅い受部が意識されている。2~4も1と同様の形狀の

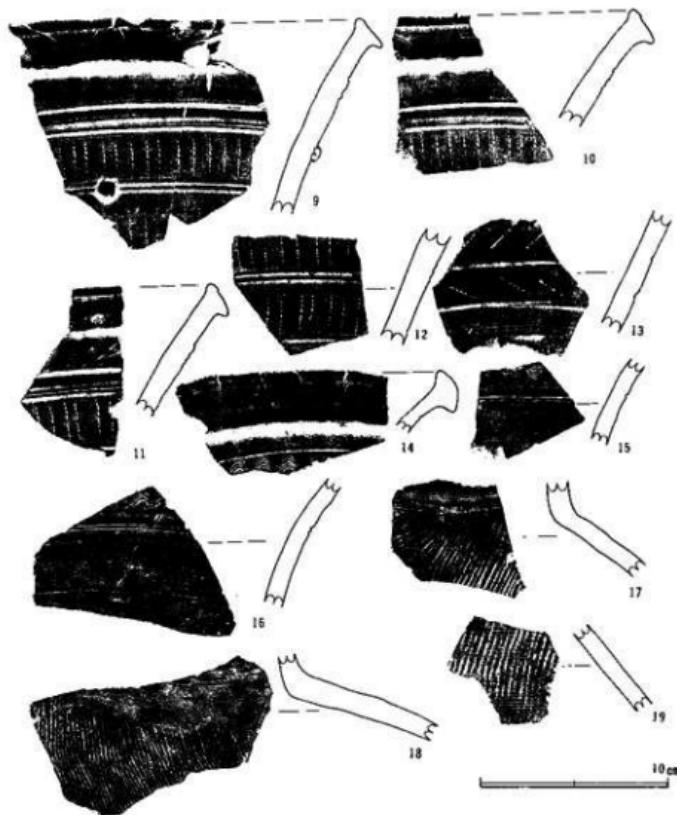


第9図 竜王2号墳遺物出土位置図



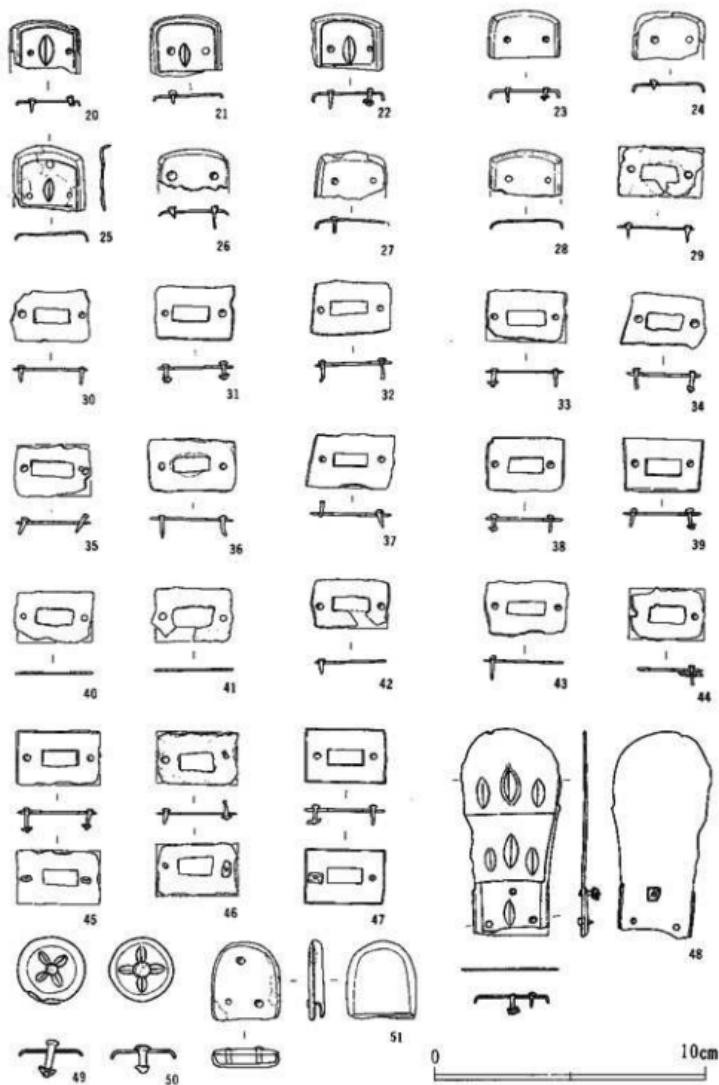
第10図 竜王2号墳出土遺物(1)

ものと思われるが、器高がより偏平で、返り口が縁部より垂下する形状のものである。5は閉塞石内より出土した杯身である。口縁は底部より直線的に立ち上がり、やや外湾する。口唇はやや丸みを帯び、底部は肥厚した偏平丸底状のもので、高台が付加されている。6は閉塞石付近より頸部が、口縁が奥壁部分から出土した長頸壺の頸部であり、口径は11.4cmを計る。口縁部は「T」字状に近い形状に拡張されている。頸部は垂直に立ち上がり、ラッパ状の口縁に移行する。内外面共にロクロ水引き痕が明瞭にのこっており、内部と外面くびれ部に自然軸が付着している。7は脇の制部片であり、肥厚した肩部に3個を1単位とする刺突文が、斜位に施文され一周するようである。肩上半部には自然軸が付着している。前庭部出土。8は6の底部と考えられるものであり、やや外傾した高台が付加されている。内面には緑色の自然軸が付着し、内外面共にロクロ水引き痕が明瞭にのこっている。第1図9~18は焼破片の拓影で9~12は前庭部周辺と前庭部西側の現墳丘表土下より検出された同一個体と思われる個体片である。口縁はやや外湾しながら段をもって拡張されており、1条凹線、2条凹線、縦方向の刺突文、円

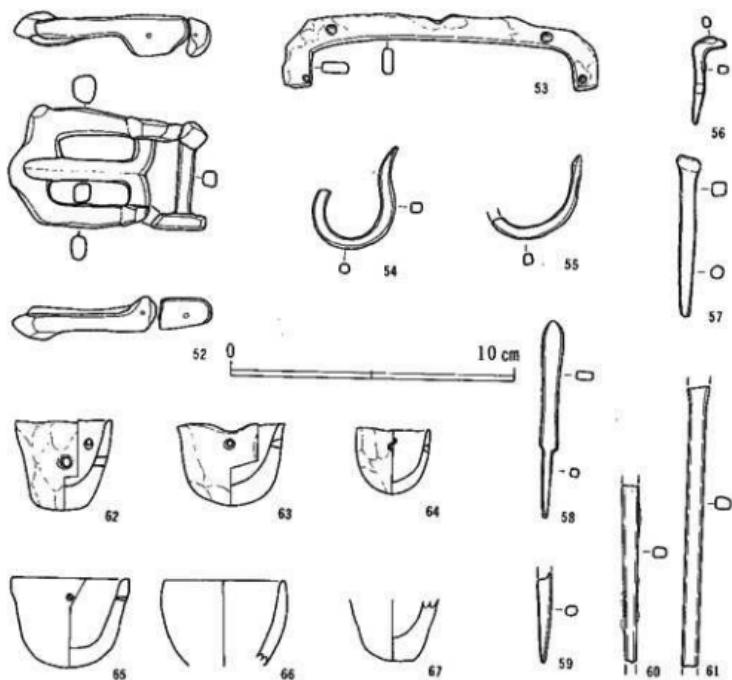


第11図 竜王2号墳出土遺物(2)

形浮文を施した2条凹線、縦方向の刺突文が、順に口縁下より施文されている。さらに12には2条凹線が刺突文の下に施文されており、9~11も同様の凹線が施文されていたものと思われる。13は石室内より出土した斐の口縁部であり、斜位に施文された6個を1単位とする刺突文が、凹線によって区画されている。14は段をもって拡張した口縁部片で、凹線区画内に櫛描き波状文が施文されている。前庭部出土。15~16も14に類するもので、1条~2条のヘラによる沈線によって区画した内部に、櫛描き波状文を施したものの。石室内出土。17~18は斐の頭



第12図 竜王2号墳出土遺物(3)



第13図 竜王2号墳出土遺物(4)

部から胸にかけての破片で、外面には薄く格子目状の叩き目が施こされ、18日は内面に横ナデが施こされている。19は外面に格子目、内面に同心円状の叩き目が施こされた胴部破片であり、内面には同心円状の叩き目の上からかるくナデ整形されている。前底部出土。

土師器（第10図、68）

68は復元口径13cmを計る土師器の杯で、石室内奥壁部分より出土した。底部は偏平丸底を呈するものと思われ、口縁部はくびれ部より直線的にやや外傾しながら立ちあがる。口縁部は横ナデが内外面共に施こされ、胴部は斜位のヘラ削り、内面はヘラナデ整形が施こされている。

帶金具（第12図20～51、第13図52、54～55）

帶金具の類はすべて石室内よりの出土であるが、敷石より数cm浮いた状態で出土した。第13図52は鉄製の鋏具で「U」字形にした縁金の基部に横棒が挿入され、その前方にやや離した位置で「T」字形の刺金がはめこまれたものであり、縁金の基部は断面隅丸長方形に幅広く作製され、横棒、刺金挿入部分の補強がなされている。奥壁部出土。54～55は弧状に曲げた鉄棒で

破損品である。鉢具の縁金の可能性もあるが、現状では確認できない。第12図20~47、49~50は帯を装飾した金銅製の鎧で、3分類される。20~28は尖端を隅丸方形に、基部を直線的に作り、「U」字形に縁辺を折り返したものであり、基部は折り返されておらず、蛇尾状を呈している。帯への装着は2本の鎧で行なわれ、方形、あるいは不整形の小さなパッキングをはめた後に鎧脚端を打って固定している。20~22、25は器形にそった区画と、木葉状の文様が細刻されているものである。29~47はほぼ 3×2 cmの方形を呈する板状鎧であり、中央部には 1.4×0.6 cmの方形中空部を作り出している。器厚は約0.7mmを計り、薄い作りである。帯への装着は2本の鎧が使用されており、鎧頭は円頭半球状で径3.2mm、鎧身径は1.6mmのものであった。49~50は円形鎧で、縁辺部を折り曲げた断面形を呈する。中央部を貫通させた大形鎧1本で、帯に固定させていた。表面に円形区画とその内部に木葉文を十字に配し、鎧頭を花弁に見立てているようである。鎧は方形鎧にくらべ大形鎧で円頭の鎧頭は径3.9mm、鎧身は径2.3mmであった。48、51は蛇尾金具であるが、形状が異なり、48は垂金具の杏葉の可能性を考えられる。形状は舌状にした鋼板の基部の両側縁を折り曲げて作成されており、表面には3区画された内部に、木葉文が細刻されている。基部の第1区画内には三角に配した鎧があり、帯に固定されていたものと考えられる。鎧は方形鎧と同一規模のものが使用されている。51は蛇尾金具で、厚さ1.5~2.1mmの鋼板を「U」字状に作整したものと、これより1回り大きめのものを作り、後者の縁辺部を折り曲げて両者を合わせて袋状に製作されている。これも鎧により帯に固定しており、三角に配された3本の鎧が認められた。鎧は径2mmの棒状鎧で鎧頭はなく、棒端部を打って固定されている。20~51までは金銅製で銅製品の表面だけに金をかぶせて作整されており、51の蛇尾金具は表裏共に金張りのようであるが、剥落が著しく明確でない。

鉄釘（第13図56~57）

56は小形ではあるが鉄製の所謂鐵道式釘状の形態のものであり、長さ3.2cm、太さ 3.5×3 mmの断面方形を呈するもので、頭部を打って一方へ折り曲げた作りである。57は鉄釘と思われるが、鐵の茎の可能性もある。頭部はやや拡張され、身は5mmの正方形の断面を呈し、末端部は円形状となるもの。

鉄錐（第13図58~61）

鉄錐は大部分が小破片となっており、形状の明確なものは数少ない。58は形態が確認できる唯一のものであり、平造柳葉式で、切先に刃がつくのみで刀身は断面長方形を呈する。59~61は尖根式の茎部片と思われるもので、有茎の鍼鉗被を有するものと思われる。断面は方形を呈し、末端部にかけて次第に細くなり（59）断面円形になるものと思われる。石室内出土。

不明金具（第13図53）

鉄製で偏平「U」字状を呈するものであり、両端と曲部に鉄棒状の鎧が打ちつけられており、断面長方形を呈する。石室内出土。

手捏ね土器（第13図62~67）

手捏ねによって作られた小形の土器で、指頭痕が明瞭にのこっている。ほとんど鉢形・コップ状を呈し、底部は丸底状である。口縁は波をうち、外湾する形態のものが大部分であるが（62~65）口唇が垂直に立ちあがるもの（66）の別がある。62~65まで口唇下に外部より貫通した孔が2孔、相対する方向からあけられており、66~67も同様であったものと思われる。石室内からの出土であるが、62~64が閉塞石近く、65~67は奥壁よりの出土であった。

遺物小結

以上が竜王2号墳より出土した遺物群であるが、あまりにも断片的な出土であり、完形で出土したものは少ない。帶金具類も鉢具と鉢、あるいは蛇尾金具が分離して分布している状態であり、須恵器類からの接合関係からも、これらの遺物總体が一時的な（副葬された）状態で遺存していたとは考えかたく、石室内が後世に乱されたことは間違いないと思われる。したがって、概観した遺物が副葬されたものすべてではないと考えられる。まな板石から20cmほど離れた状態で、閉塞石付近から人骨の大腿部と思われる骨片が出土しているが、他の骨片、齒、骨粉等の出土は皆無であった。

（伊藤 恒彦）

第2節 竜王3号墳

1. 墳丘・石室構造

中臣郡竜王町竜王新町字二ツ塚1864番地、標高 327mに所在するこの古墳は調査前には雑木林に覆われていた。周辺は桑園であった。墳丘は周囲よりかなり削平されている。

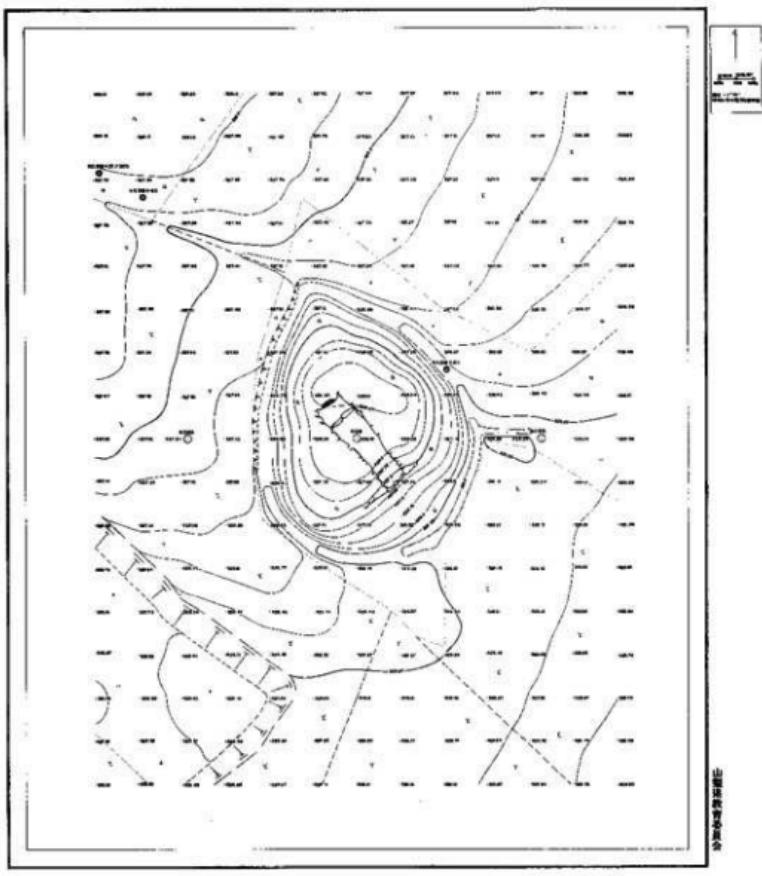
(1) 墳丘

現存する墳丘の外径は約10m、墳丘の高さは基底面中央部よりも約1m、墳頂部は削平され、本来の高さは著しく減じられている。墳丘は旧地表上にその大部分を盛り上げているが、石室根石は旧地表黒色土と地山を若干掘り下げて構築している。旧地表上の厚さは10~20cmで漆黒色を呈しており、墳丘中心部に向うにしたがい堅くしめつけられている。これは墳丘位置を決定した際に整地し土地を踏み固めたと考えられ、更に墳丘の土圧が加えられたものであろう。

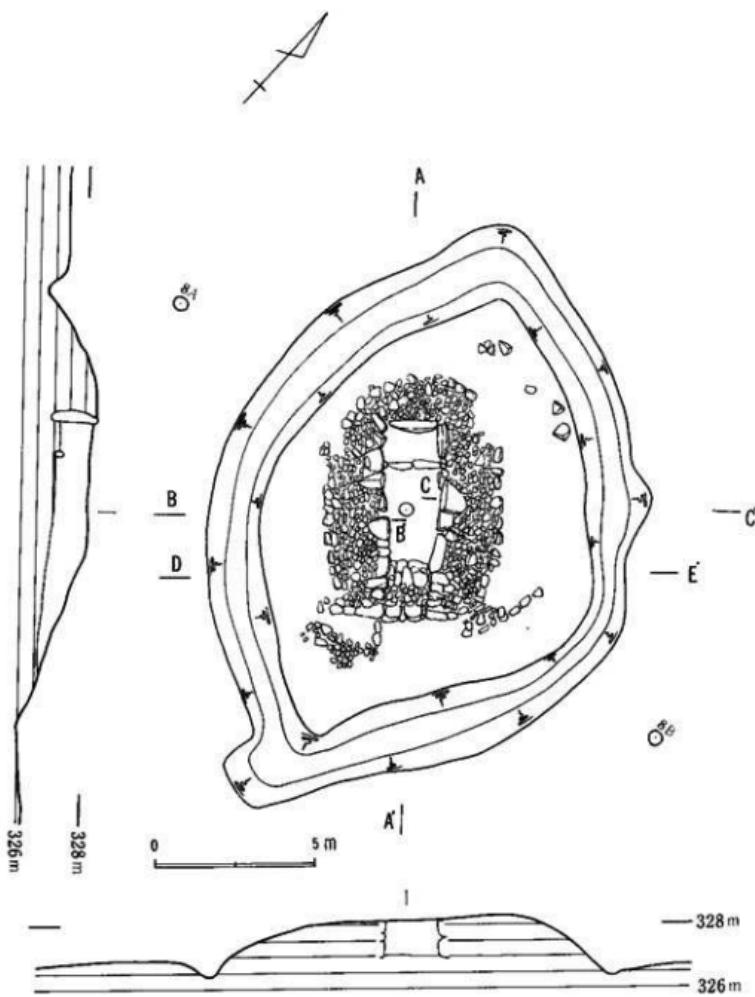
盛土は下部及び石室裏込め寄りは水平に明褐色土と暗褐色土を交互に積むが、墳丘外側にゆくにつれて斜めに盛り上げている。土壇の周囲には古墳築造以降の溝がめぐらしく、古墳の正確な径を把握することはできないが、中央東西セクションで観察する限りでは、石室中軸線より半径5m余を計る。

原地形は東南斜面で、約1%弱の勾配が現在の地表で認められる（第15図）。盛土は恐らく周囲の土を削り取って盛ったもので、特に南側を多く削り古墳の正面から眺めた場合に盛土以上に大きく見せる効果を考えたものであろう。

正面墳丘中段に人頭大の碟が墳丘をめぐるように数個並んでいる。墳丘北側の数個の碟もそれと同じ性格と思われ、墳丘に伴う可能性が強い。



第14図 竜王3号墳現況平面図



第15図 龍王3号墳全図

(2) 内部施設

石室は盛土の中心にあってN 40° Wの主軸方向を示す無袖型横穴式石室で天井石及び側壁の上半分はすでに持ち去られており、天井石、側壁と考えられる石は近辺には散乱していない。地元の話によると、中央線開設時に栗石として破碎したということである。しかし天井石と側壁の一部のみで中央線の用石とするにはあまりに少なく、むしろ近隣の畠の石垣及び地境の石として利用されたと考える方が適当ではなかろうか。

石室の関係数値を列記すると、石室内奥壁巾 190cm、渾門巾 125cm、中央巾 170cm、東側壁長 610cm、西側壁長 595cm、玄室長（主軸上） 420cm、閉塞石の厚さ 190cmである。奥壁は 170cm × 150cm × 40cm ほどの巨大な平石を直立させており別に破碎されている形跡はない。しかし礫床面より高さ 120cm ほどであり、それのみをもって奥壁とするには、少々低すぎるようである。おそらく上部に横石が為されて当時は 2m 近い高さであったのだろう。基底部は平らであるが、上部は積石がおむすび形に丸く積まれていたと思われる。

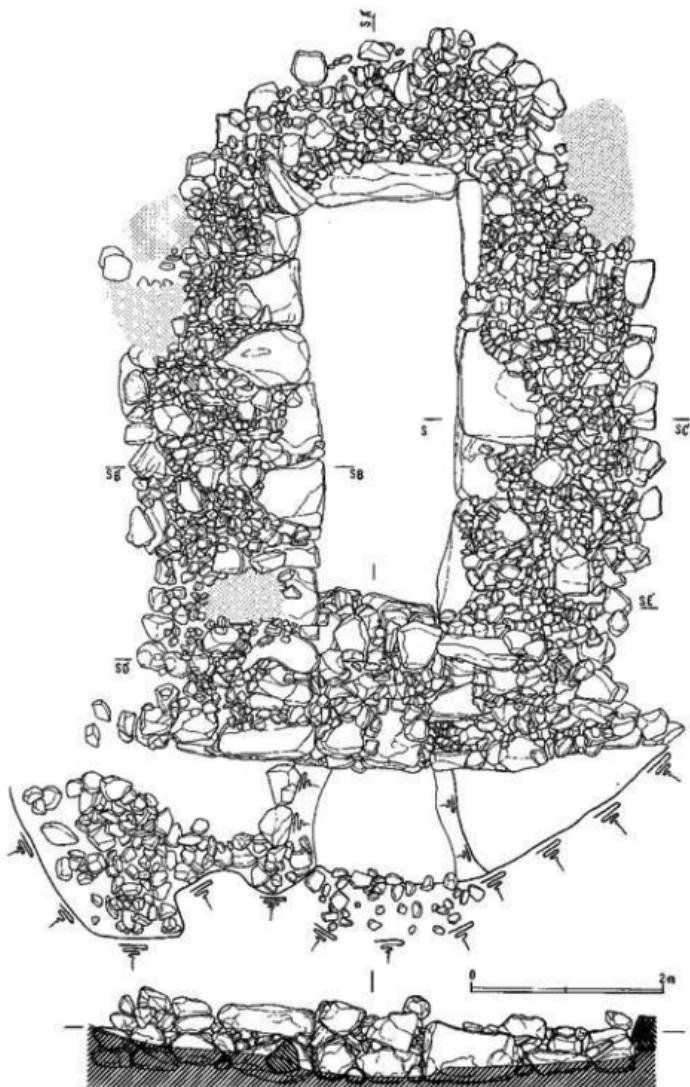
側壁は自然石割石乱石積と呼べるもので、基底部の石は東側壁が 6 個で奥の 4 個は広口と横口を内面にして前 2 個は小口を内面にそろえている。二段目以上は 1 個しか残っていないが小口積みである。石の大きさは渾門近くの 2 個が極端に小さく、他は大きいものを使用している。巨石の隙間には割石をつめて安定させている。

西側壁は基底部に 7 個の石を使用しており、奥の 5 個が全て広口を内面に向けて、前の 2 個は小口積である。二段目はほぼ中央の広口積の一例を除けば他はすべて小口積である。巨石の隙間には東側壁と比べるとかなり大きな割石が詰められている。

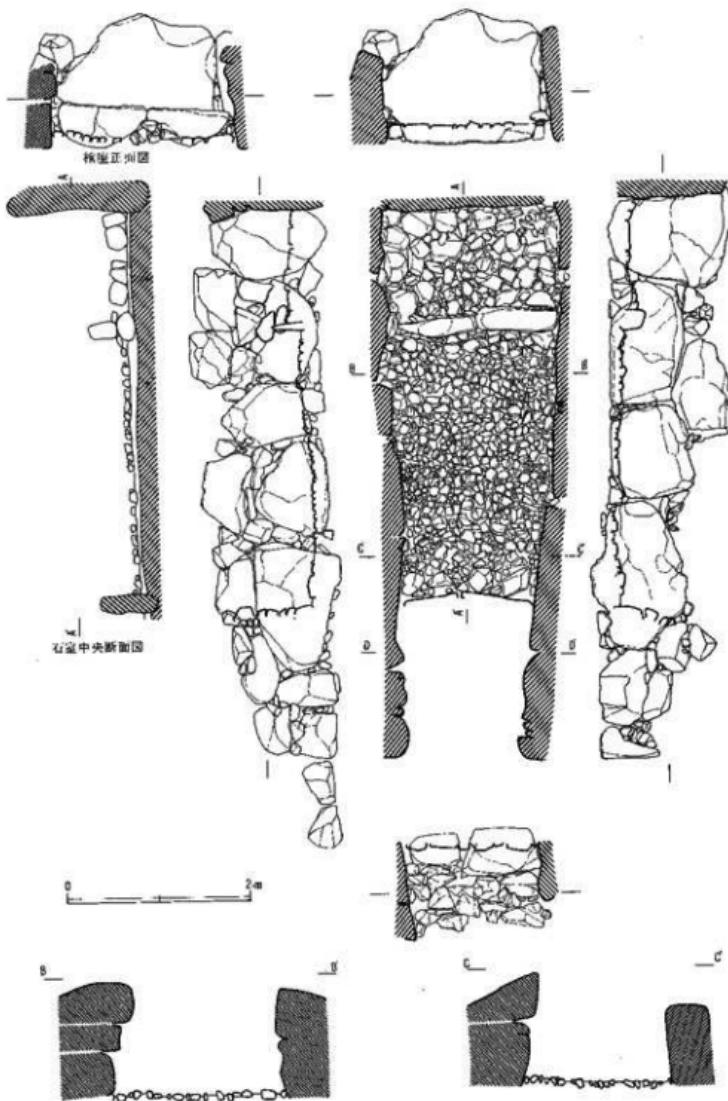
現在の壁高は東西とも約 120cm ほどであり奥壁の平石の高さとほぼ等しい。

石室礫床は側壁根石底面よりやや高く造られており、閉塞石から奥壁へ玄室の約 30cm ほどの隙間に細長く板状の巨石 2 個が横たえられ玄室内を仕切っている。その仕切石と奥壁の間は他の礫床部分よりも 10~20cm 高い礫床となっている。使用している礫も仕切石と奥壁の間が人頭大の角礫が數かれているのに対して、他の部分は拳大のものがほとんどである。礫床は入口部に向ってゆるやかに傾斜して仕切石と閉塞石の間では約 10cm の高低差が認められる。なお敷石は閉塞石の下までは統一ではない。

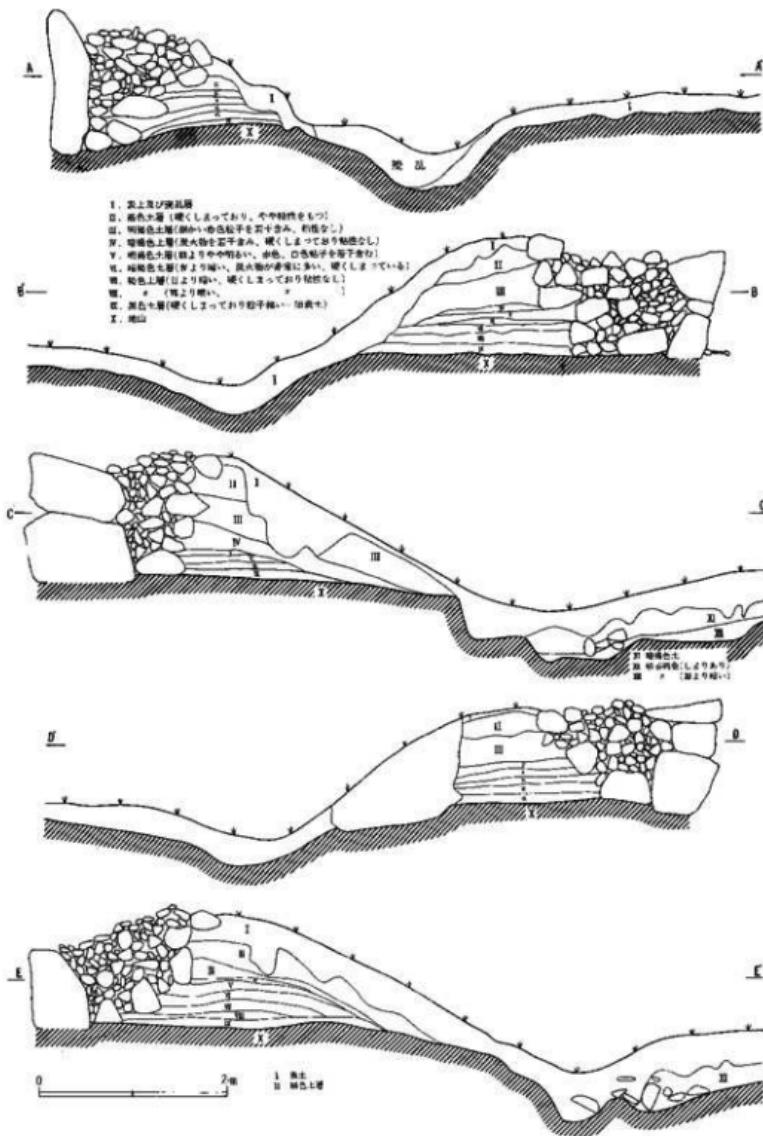
閉塞石は前述したように巾 120cm、奥行 190cm で渾門巾一杯に積まれている。残存する高さは約 90cm であるが、渾門正面は側壁渾門正面と同一面に石を並べている。その正面基底部には大きな石を 2 個並べ、いずれも横口を正面に向いている。更にその上には同じ大きさの角礫を 2 個並べ、いずれも横口を正面に向いている。更にその上には同じ大きさの角礫を 2 個小口積にしている。内面には 80 × 50 × 25cm の大きな角礫と 50 × 30 × 25cm ほどの角礫を共に広口に置いている。その上に人頭大の角礫を積み上げてそれらの間に拳大の割石を詰めている。この内外の石の間には人頭大角礫と拳大の角礫を不規則に投げ込む。現存する閉塞石は盜掘によって動かされていないことが調査により判明した。しかし、この閉塞石は古墳時代のものではなく



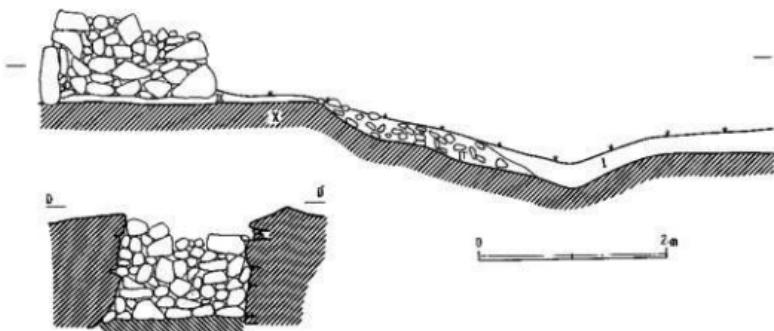
第16図 竈王 3号 墓石室平面、正面図



第17图 童王3号填石室展开、断面图



第18図 竜王3号墳土層断面図



第19図 龍王3号墳閉塞石断面図

いことも確認されている。このことは遺物のところで後述する。

前庭部は地山黒色土層上に造られ石室内レベルと一致するが、中央部主軸上がやや窪み両側にゆるやかに登っている。巾は170cm、長さ110cmほどと思われ敷石は存在しない。築造当時は角礫が散かれてあった可能性も充分に考えられるが、現状からは判断を下し難い。ただ前庭部西側に入頭大の角礫が2個並びその他やや小さい礫も続けて並べられているようである。前庭部の両側を区画したものと考えられるが、東側には礫は残っていない。

石室の裏込石の厚さは石室内面より測ると東側210cm、西側204cm、奥壁では170cmでありたっぷりとした容量をもっている。裏込めの外側をめぐる石積は長い石を横に並べたり大きな角礫を置いてあるが、積まれたというよりも外側へ広がるように造られており、断面測量の場合にも上部裏込がせり出していく落石する危険性があった。裏込石は東側も西側も奥壁側もほぼ同じ大きさの石が用いられており、石の間にはあまり土は入り込んでいない。

(米田 明訓)

2. 龍王3号墳出土遺物

(1) 遺物出土状態概要

本墳ではその石室埋土がさほど大きな攪乱を受けている様子もないため、出土する遺物を全点計測することにした。遺物出土状態を土器類、人骨、玉類、鉄製品と大きく四種類に分けて図式化したものが第20、21図である。

土器類について観察すると、一括土器のほとんど全ては石室南部の閉塞石寄りの地点に集中している。しかしそれらは全て土師器の中で最も新しい時期に属する国分期、それも平安時代のものと考えられ注目される。また、付け加えておくならば、閉塞石を取りはずす際にも、その中から多量の国分期の土師器片が検出されている。

以上の国分期の土師器と関連を有するものとして人骨があげられるだろう。本墳では遺存状

態は悪いものの多量の人骨が出土している。それらが埋葬人骨であることがほぼ間違いないものであろうが、出土状態はかなり乱雑であり埋葬時の姿をとどめているとは思えない。おそらく埋葬後に何らかの理由で人為的な攪乱を受けたものと考えられる。

さて人骨は奥壁寄りと閉塞石寄りの2ヶ所に集中している。後者の閉塞石寄りの人骨に伴つたのが前述の国分期の一括土器群である。石室蝶床より若干浮いた状態で骨も土器も入り乱れて出土しており、閉塞石寄りの人骨は国分期のものと考えては間違いないであろう(1)。それに対して奥壁寄りの人骨には、その時期を推定すべき土器は伴っていない。なお人骨についての分析の詳細は別項を参照されたい。

さて玉類については個体数にして400個以上のものが出土している。その出土状態を観察すると、出土した玉の大部分は4ヶ所に集中している。それぞれの集中部分をA～Dと呼ぶことにする(第21図上)。この中でAは管玉をはじめガラス玉、土玉をほぼ同一レベルで出土している。そして注目すべきは、これら全てが先の奥壁寄り人骨の直下に位置していることなのである。人骨が人為的な攪乱を受けている可能性を前に指摘したが、奥壁寄りの人骨と玉類出上部Aはかなり強い関連性を有していると考えて良いのではないか。それ故閉塞石寄りの人骨が平安時代のものと思われるのに対して、奥壁寄りの人骨は古墳時代のものと考えられるだろう。

次に玉類出中部分Bは、50個ほどのガラス玉を非常に濃い密度で出土している。Aと共に玉が集合した形の何らかの遺物の存在を想定させる。他に集中部分CとDがあるが、密度はそれほど濃くはないものの確かな集りを示している。

鉄製品の出土状態をみると、奥壁寄りで、先の人骨とは反対側つまり東側で、ほぼ同じ大きさの金環が並んで2個出土している点が興味深い。その他に右室のほぼ中央の東側壁寄りに鉄鎌が集まって出土しており、前述の玉類集中部分Bとの関連性を示しているように感じられる。

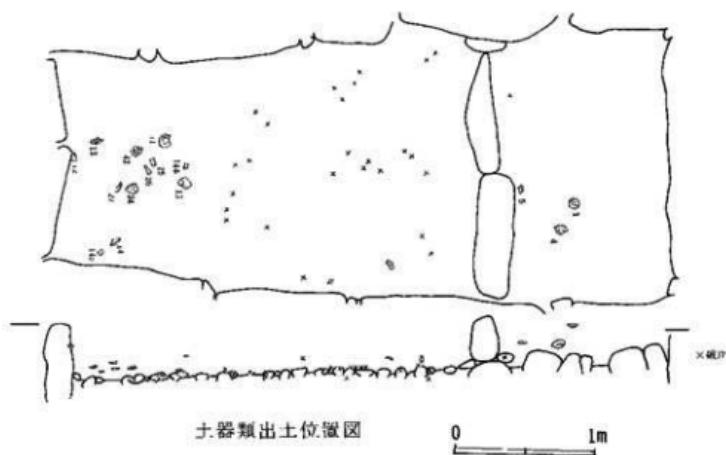
2. 出 土 遺 物

本墳から出土した遺物の中で古墳時代のものと断定できる遺物の多くは、玉類、鉄製品に限定されている。すなわち更に細かな時期決定を可能にする須恵器あるいは土師器の量は尖り貧弱なものである。その点から考えれば、これから示す出土遺物の数々をもって本墳における一おそらく複数回の一塊葬に伴う副葬品の全てとは断言できぬことは明らかである(2)。

(1)須恵器(第22図参照)

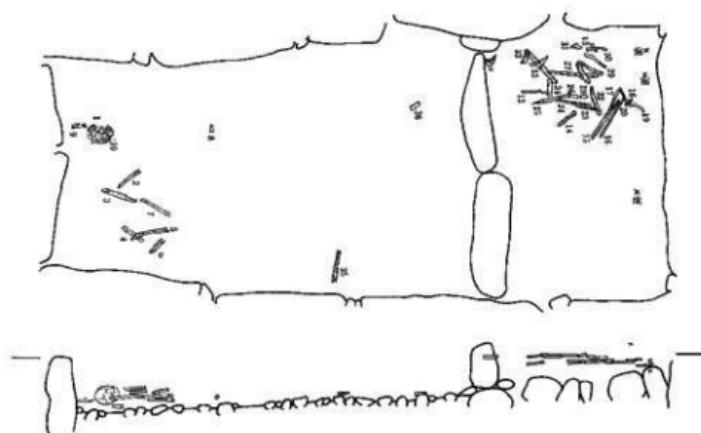
○杯：1は口径(推定)10cm、器高(推定)3.2cmのやや丸底の杯である。器形は全体に浅く偏平であり、受部はほぼ水平に外方へのびている。たちあがりは欠損している。内面はロクロ水引痕が明瞭で、胎上中には石英か長石と思われる細かな白色粒子が多量に含まれている。全体として茶色味がかった青灰色を呈しており、器体下半は斜方向のヘラ削りが施されている。

○台付長頸瓶：2は底径(推定)13cm、残存高6.3cmの台付長頸瓶の脚部である。縫部はかなり急な立ちあがりを見せており端部は台形上に広くなっている。胎上は実に緻密で、わずかに石英か長石かと思われる粒子が混入している。7は台付長頸瓶体部で、体部最大径18.2cm。茶



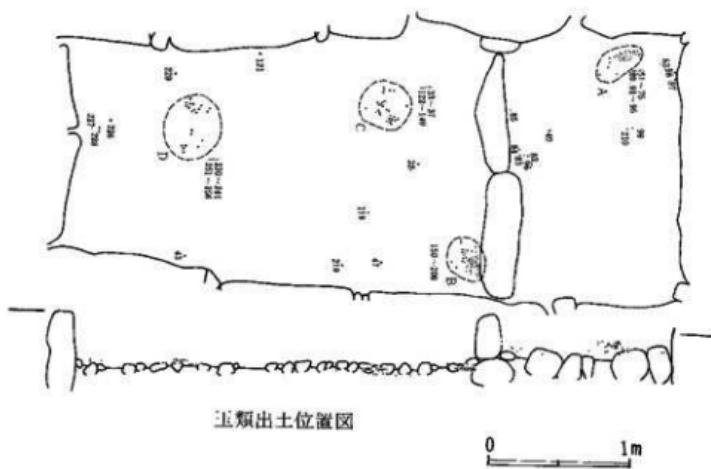
土器類出土位置図

0 1m



人骨出土位置図

第20図 竜王3号墳(土器、骨)遺物出土位置図



色味がかった青灰色を呈する。胎土は細かく若干の石英粒子を含んでいる。

○壺：3は口径20cm、残存高6cmの壺の口頭部である。内外面とも自然釉が見られ、外面は黒色、内面は黒灰色を呈する。胎土は極めて緻密。4も壺の口頭部で口径22cm、残存高7.5cm。外面は青灰色、内面は茶灰色を呈し胎土中には小石が若干含まれ、細かい長石や石英の粒子も混入している。

○その他：5と6は壺の底部と思われ、5は灰白色を呈し内面には自然釉が認められる。底径は8cm。6も内面に自然釉がみられ、底径は7.4cm。以下破片として図示したものは8は壺の頭部、9は提瓶の体部、10は壺の体部と思われる。12、13は壺の口縁部、15は頭部で、その他11、14、16、17は壺の体部である。

(2) 土師器（第23図、但し22は除く）

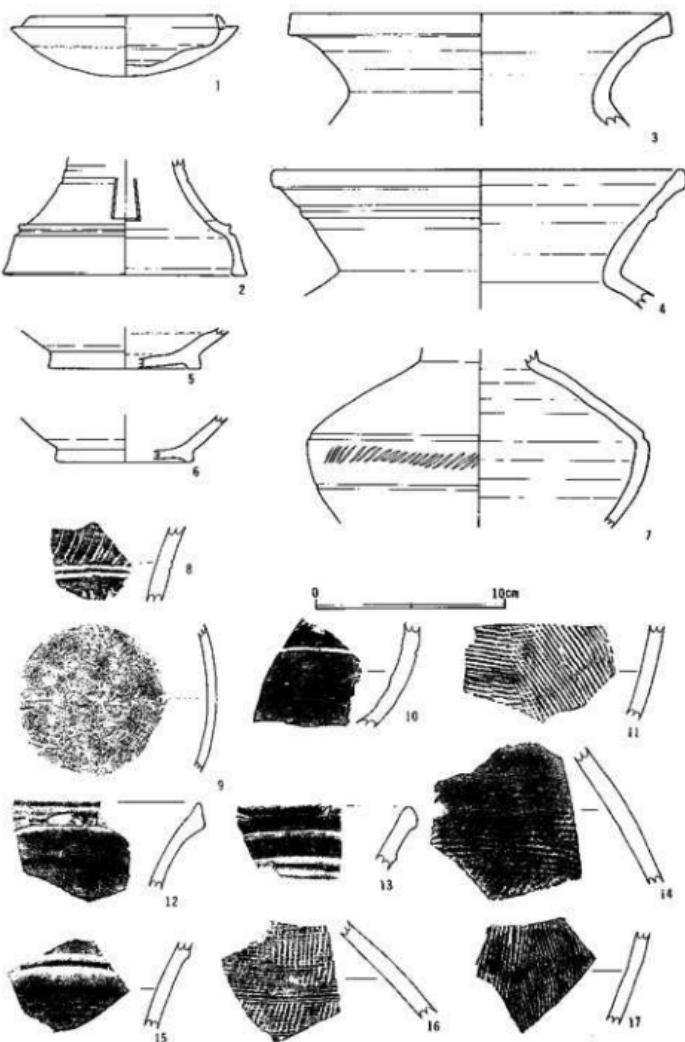
○杯：古墳時代の土師器は1個体しか確認できなかった。18の杯がそれで口径12.6cm、器高3.8cm。体部の棱を境にして上は横ナデ、以下は底部方向からのヘラ削りが施されている。内面は横ナデ、底部は丸底で口唇は後の間にかなり張り出している。また棱の上はヘラで器体を一周浅く抉りとっている。内外共赤褐色を呈し、胎土には小石をかなり含むがしまっており良好。焼成も良好。

19~21、23~26は平安時代の土師器杯である。(3)19は口径14.8cm、器高4.4cm、底径5.2cm。外面は赤褐色で上部はロクロ水引き、下半は底部方向からのヘラ削り、内面は黒色でロクロ水引。胎土も焼成も良好である。底面もヘラ削りが施されている。20は口径（推定）器高3.9cm、底径5.4cmで内外共赤褐色を呈する。外面はロクロ水引きの後に底部方向からヘラ削りが施されている。内面はロクロ水引き、底面はヘラ削りされている。胎土、焼成とも良好である。21は口径（推定）13cm、器高4.2cm、底径5cmで内面は褐色、内面は黒色を呈する。外面はロクロ水引きの後に底部方向からのヘラ削りが行なわれており、内面はロクロ水引きの上から鋸歯状の暗文が施されている。胎土、焼成とも良好である。以上の19~21は全て玉縁口縁を呈し、口縁もゆるやかに外方へ広がっている底の比較的小さな杯である。

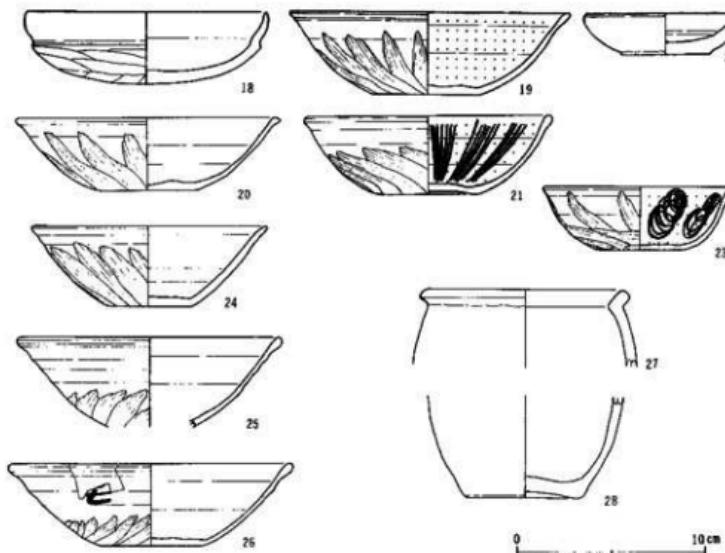
23は玉縁口縁を呈するものの他の杯と比較するとやや小型で口縁の立ち上りも急である。口径は10.2cm、器高3.4cm、底径4.4cmで、外面は赤褐色を呈し半分ほど焼きむらで黒色になっている。内面は黒色で螺旋状の暗文が施されている。形状は外面ロクロ水引きの後に上半は縱方向、下半は横方向のヘラ削りが施されている。胎土には小石をかなり含むが良好である。焼成も良好。

24はやや尖唇口縁の杯で口径12.5cm、底径4.3cm、器高4.3cm。外面は赤色を呈しロクロ水引きの後に底部方向からのヘラ削り。内面は赤褐色を呈し、ロクロ水引き。底面はヘラ削りが施されている。胎土には小石を多量に含む。焼成は良好。

25は口径（推定）14cm、残存高4.8cm。内外とも赤褐色を呈し、外面はロクロ水引きの後に



第22図 龍王3号墳出土遺物(1)



第23図 龍王3号墳出土遺物(2)

底部方向からヘラ削り、内面も赤褐色を呈しロクロ水引き。26は口径(推定)15cm、器高4.4cm、底径5.2cmで内外とも赤褐色を呈する。外面はロクロ水引きの後に底部方向からヘラ削り。墨書きが見られるものの上半分が欠損しており文字は不明。胎土は多量の小石を含むがきめが細かく良好。焼成も良好。これら25と26も前の19~21、23と同様に玉縁口縁である。

○甕：27と28はおそらく同一個体の甕の口頭部と底部であると思われる。口径10.2cm、底径6.2cmを測る。しかし外面も内面も状態が悪く整形等については一切不明。胎土は荒く焼成も良くない。

(3) 土師質土器 (第23図22)

22の土器は口径8.5cm、器高2.2cm、底径4.7cm。胎土は多量の砂と雲母を含み粒子は荒い。焼成は軟弱で、内外面とも赤褐色を呈する。整形は内外面ともロクロ水引き痕が明瞭に残り、底部は糸切り底である。器厚は7mm前後で口唇は丸く外傾し器体はややふくらむ。中世以降のものと考えられる。

(4) 馬具 (第24図33~45、47)

○飾金具：出土した飾金具類は大きく3種類に分類が可能である。それを仮にA~Cと呼ぶ

ことにする。

A類は33~41であり、鉢の数は2本か3本で板状の金具である。形は長方形の一端二隅を切り落すか、丸くしたものである。33~35、37、41の金具は金張りが良い状態で残っている。38~40はわずかに金張りが残り、36はほとんど残っていない。しかし全て鉄地であり、36以外は明確に金銅張りが認められる。

B類は42、43がそれにあたり、形はほぼ正方形であるが周囲は押圧されている。42は鉢が4本、43は2本の違いはあるものの、いずれも鉄地金銅張りである。但し金張りの状態はあまり良く残っていない。

C類は47である。周囲が押圧されているところはB類と同じであるが、その大きさ、形状は全く異なる。形は菱形で大きさは一辺が6cmほどもある。鉄地金銅張りで金張りも非常によく残っている。

○鉢金具：44は帯の鉢金具である。鉄製であり、製作方法は状態が悪く不明。

○その他：45は何らかの鉢と思われるが詳細は不明。鉄製。

(5) 武器 (第24図45、48~51、第25図)

○鐸：46は鉄製の鐸であり倒卵形を呈する。厚さは約5mm前後で透穴は存在しない。

○刀子：48、51~53、55は片刃平練平造。49、57は両刃平造。すべて鉄製。

48は鉾と茎の端が欠損しており残存部12cm。上部の闇はややそり上がっている。49は全体にそりをもつ基に木質がわずかに残っている。全長約13cmを測る。52は全長14.5cm。54は刃部がかなり欠損しているが全長10.5cm。57も刃部の一端が欠損している。残存部全長9cm。

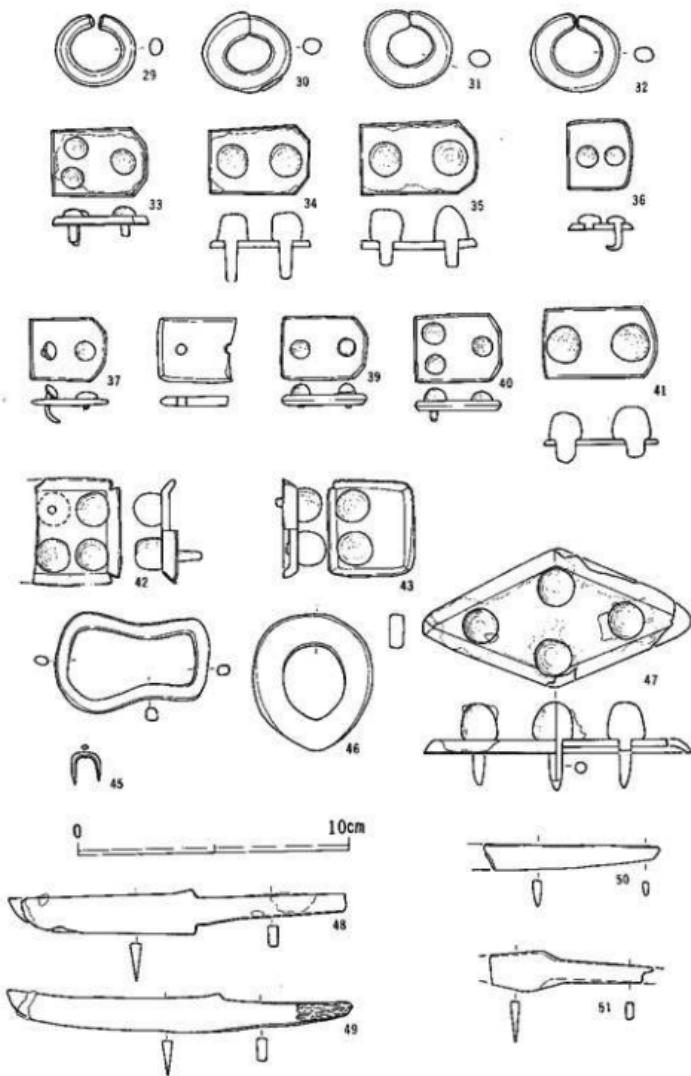
54は特異な切出形を呈する鉄器である。おそらく刀子と思われるが、全長の半分ほどが茎にあたり、木質がかなり良好に残存している。一応両刃平練平造である。全長9.6cmである。

○直刀：56はややそりをもつものの直刀の一部であろう。平練平造。

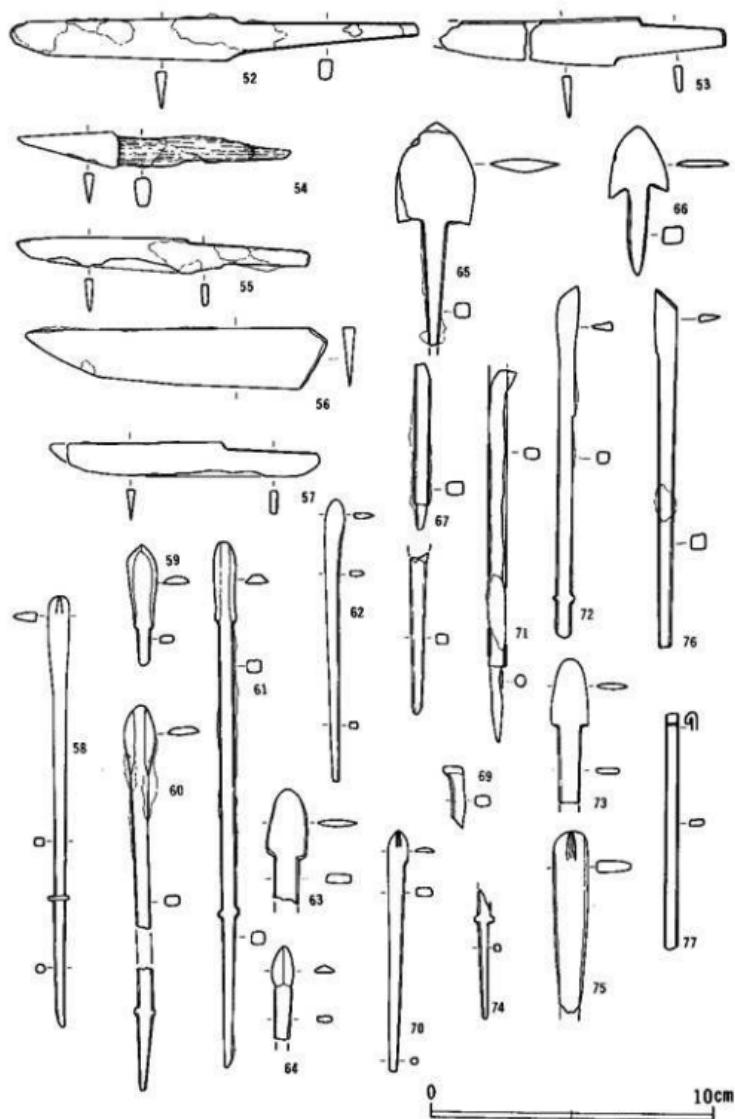
○鉄鎌：平根鎌2本をはじめとして18本の鉄鎌が出土している。その中で形式の判別が可能なもののみをあげる。

65は鉾と茎の端を欠損しているが全長約9cmの平根鎌で有茎両丸造主頭式。66は全長が5.5cmで有茎広鉾両丸造三角形式。58は全長15.5cmの棘笠被闇無片刃箭式。59は全長4.3cmの無茎端刃式。60は全長約14cm前後の片丸造棘笠被箭式。61は出土した鉄鎌の中でも最も長いもので全長18.8cmの60と同じく片丸造棘笠被箭式である。62は全長10cmの闇無片刃箭式。70は全長8.5cmの片小爪鑿箭式。72は全長12.5cmで棘笠被片闇片刃箭式に属するものであろう。76は全長12.7cmの片闇端片刃箭式と思われる。75は大部分欠損している例であるが、おそらく円頭細根斧前式と呼べるものではないだろうか。

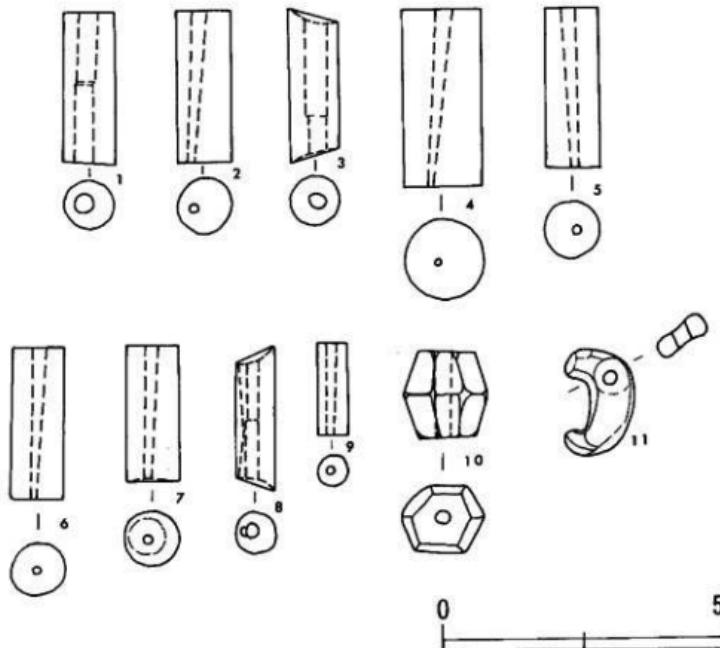
その他はかなり状態の悪い鉄鎌片が多く、中には鉄鎌なのか他の鉄製品なのか判別が不可能なものも存在する。例えば69などがそれであり、ここでは一応説明を省く。



第24図 楚王3号墳出土遺物(3)



第25図 竜王3号墳出土遺物(4)



第26図 竜王3号墳出土遺物(5)

(6) 不明鉄製品

第25図77は用途不明の鉄製品である。全長8.5cmの棒状のものであり、片方の端をU字状に曲げている。

(7) 装身具類

○金環 (第24図29~32)

金環は4個出土しているが、いずれも状態が悪く金張りはほとんど残っていない。

29は比較的の遺存状態が良かったもので直径3cm、厚さ径5mmの鉄地金銅張りの金環である。しかし金張りは所々に点々と残っているだけである。30と31は並んで発見され、その大きさから見てもおそらく対を為すものと思われる。共に直徑3.3cmで、厚さ径も6~7mmほどである。金銅は全く残っていない。

32は30、31と大きさはほとんど同じである。やはり金銅は全くみられない。

○管玉：（第29図1～9）

管玉は9個出土している。すべて緑色の碧玉製である。大きさは最大が4の直径1.3cm、長さ3.1cm、最小が9の直径5mm、長さ1.6cmで、他のものもこれら2つの間におさまる大きさである。穿孔は一端から円錐形に貫通されているもの（2、4～7、9）と、両端から貫通を試みて、若干のズレを生じているもの（1、3、8）の2種類がある。8などは両端から2度づつ計4回の穿孔を試みている。

○切子玉（第26図10）

水晶製の切子玉である。断面の形状は六角形であり、穿孔は一方から施こされている。長さは1.5cm、最大幅も1.5cm。水晶の質はあまり良好ではなく白っぽい。

○勾玉（第26図11）

滑石製の勾玉で表面はよく研磨されており艶がある。長さは2cmで最大巾は8mm、厚さ4mm前後、孔は3mmの径をもつ。

○土製練玉（第27図1～71）

合計79個の土製練玉が出土しているが、中に3個連なったものが1例、2個連なったものが6例ある。大きさで最大のものは68で、長さ1.2cm、最大径1cm。最小のものは71で長さ、最大径とも3mmである。いずれもほぼ球形に近い形をしている。図面上では表現できないものの、良好な例からその製造法を推測すると、細い棒状の軸に粘土をまきつけ回転させながらヘラで切り落とし大量に製造したものと思われる。

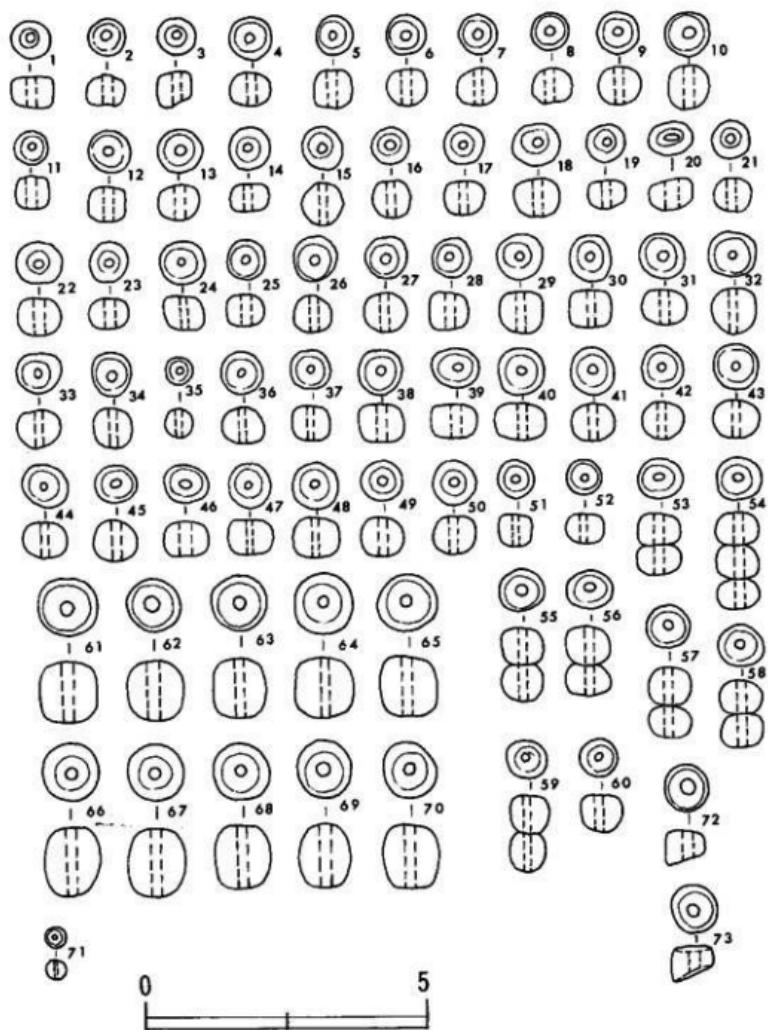
○臼玉（第27図72、73）

2個とも滑石製の臼玉である。大きさもほぼ同じで直径9mmで研磨はそれほど良好ではない。孔の直径も2mmほどである。

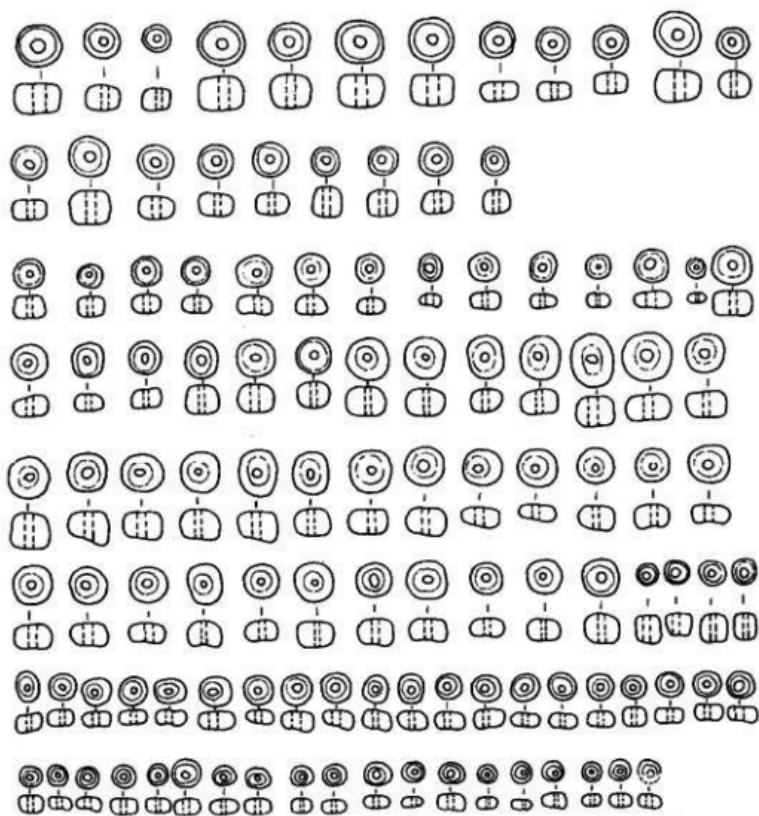
○ガラス玉（第28図、第29図）

合計344個のガラス玉が出土している。第28図72の緑色の1例を除いて他は全て青色である。大きさは直径4mm前後、厚さ3mm、前後のものが圧倒的に多く全体の8割を占める。それ以上の大型のガラス玉は先の遺物出土状態のところで示した玉類集中部分Bからまとまって出土している。大きさは直径7mm前後、厚さ4mm前後のものである。

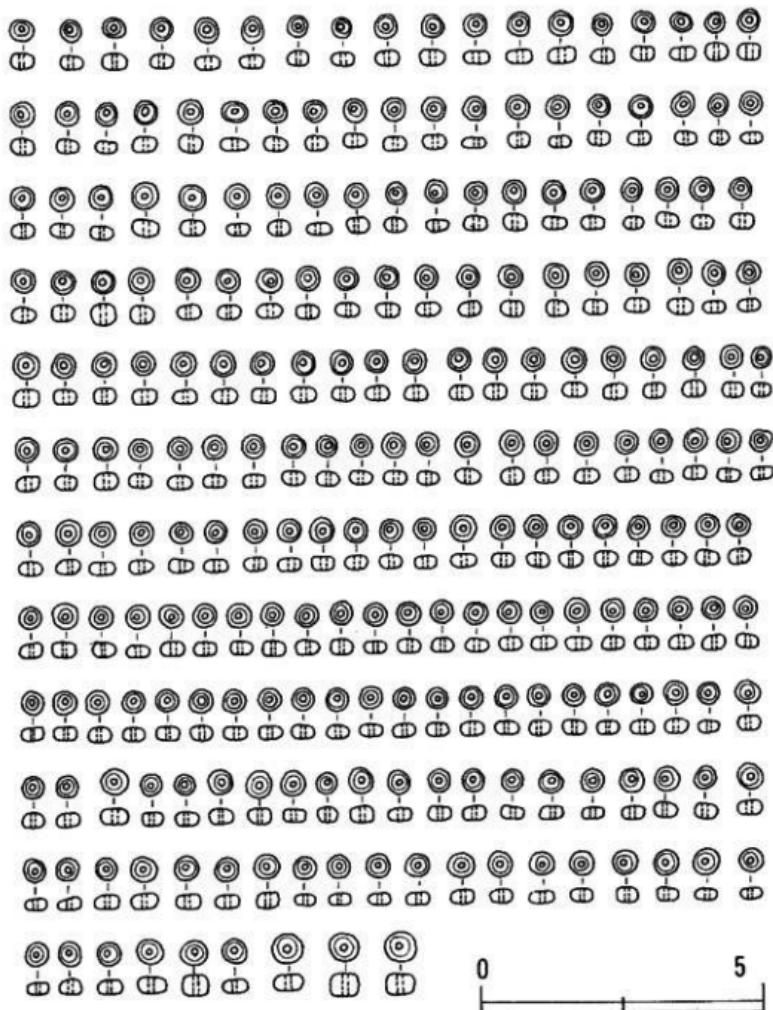
以上極く簡単ではあるが竪玉3号墳の出土遺物の概要を示した。本墳に埋葬された遺体は人骨から考えれば最低2体（但し、1体は平安時代のものである可能性が強い）玉類の分布から見ると4体、金環は出土した4個の中で2つが対を為すと考えられ、他の2個は別の対を為すと思われるので、3体の埋葬が推測される。可能性としては3～4体の遺体が埋葬されたものと言えるだろう。言うまでもなく、ここに示した遺物が副葬品の全てではないだろう。石室埋土の状態が良好だったにせよ、古墳築造そして初めての埋葬が行なわれた直後から、かなりの人為的な攪乱が今日までくり返されてきたことは否定できないものであろう。（米田 明訓）



第27図 竜王3号墳出土遺物(6)



第28図 竜王3号墳出土遺物(7)
(左上から右へ 1~115)



第29図 竜王3号墳出土遺物(8)
(左上から右へ 1~229)

| 第26图 | | 30 | 64 | 72 | 85 仕切右下 | 40 | 169 | 82 | 8 |
|------|-----|----|------|----|------------|----|-----|-----|------|
| 1 | 57 | 31 | 72 | 73 | | 41 | 157 | 83 | 9 |
| 2 | 59 | 2 | 74 | | 166 | 43 | 177 | 85 | 10 |
| 3 | 56 | 33 | 76 | 1 | 200 | 44 | 161 | 86 | 11 |
| 4 | 55 | 34 | 61 | 2 | 193 | 45 | 157 | 87 | 12 |
| 5 | 60 | 35 | 75 | 3 | 160 | 46 | | 88 | 13 |
| 6 | 53 | 36 | 91 | 4 | 185 | 47 | | 89 | 14 |
| 7 | 54 | 37 | 70 | 5 | 153 | 48 | | 90 | 15 |
| 8 | 58 | 38 | 94 | 6 | 152 | 49 | | 91 | 16 |
| 9 | 65 | 39 | 71 | 7 | 178 | 50 | | 92 | 17 |
| 10 | 49 | 40 | 62 | 8 | 171 | 51 | | 93 | 18 |
| 11 | 119 | 41 | ③ | 9 | 141 | 52 | | 94 | 19 |
| 第27图 | | 42 | ③ | 10 | 49 | 53 | | 95 | 20 |
| 1 | 133 | 43 | 75 | 11 | 180 | 54 | | 96 | 21 |
| 2 | 138 | 44 | 67 | 12 | 151 | 55 | | 97 | 22 |
| 3 | 123 | 45 | 92 | 13 | 141 | 56 | | 98 | 石 23 |
| 4 | 129 | 46 | 68 | 14 | 32 | 57 | | 99 | 室 24 |
| 5 | 131 | 47 | 棺座 | 15 | 168 | 58 | | 00 | 内 25 |
| 6 | 135 | 48 | 148 | 16 | 172 | 59 | | 101 | 26 |
| 7 | 147 | 49 | | 17 | 189 | 60 | | 102 | 27 |
| 8 | 139 | 50 | | 18 | 167 | 61 | | 103 | 28 |
| 9 | 132 | 51 | 棺座 | 19 | 192 | 62 | | 104 | 29 |
| 10 | 137 | 52 | | 20 | 170 | 63 | 石 | 105 | 30 |
| 11 | 122 | 53 | | 21 | 182 | 64 | 室 | 106 | 31 |
| 12 | 128 | 54 | | 22 | 175 | 65 | 内 | 107 | 32 |
| 13 | 141 | 55 | 37-2 | 23 | 174 | 66 | | 108 | 33 |
| 14 | 125 | 56 | 37-1 | 24 | 162 | 67 | | 109 | 34 |
| 15 | 149 | 57 | 34 | 25 | 156 | 68 | | 110 | 35 |
| 16 | 134 | 58 | 35 | 26 | 199 | 69 | | 111 | 36 |
| 17 | 130 | 59 | 36 | 27 | 179 | 70 | | 112 | 37 |
| 18 | 127 | 60 | 33 | 28 | 183 | 71 | | 113 | 38 |
| 19 | 140 | 61 | | 29 | 165 | 72 | | 114 | 39 |
| 20 | 136 | 62 | 棺座 | 30 | 173 | 73 | | 115 | 40 |
| 21 | 124 | 63 | | 31 | 197 | 74 | | | 41 |
| 22 | 142 | 64 | 98 | 32 | 155 | 75 | | | 42 |
| 23 | 126 | 65 | 52 | 33 | 163 | 76 | 1 | 230 | 43 |
| 24 | 63 | 66 | 51 | 34 | 256 | 77 | 2 | 236 | 44 |
| 25 | 73 | 67 | 99 | 35 | 150 | 78 | 3 | | 45 |
| 26 | 棺座 | 68 | 210 | 36 | 154 | 79 | 4 | | 46 |
| 27 | 93 | 69 | 88 | 37 | 187 | 80 | 5 | | 47 |
| 28 | 69 | 70 | 97 | 38 | 195 | 81 | 6 | | 48 |
| 29 | 66 | 71 | 43 | 39 | 159 | 82 | 7 | | 49 |

第2表 竜王3号墳玉類出土位置一覧表

| | | | | | | | | | | | |
|----|---|-----|---|-----|---|-----|--|-----|-----|-----|--|
| 50 | | 92 | | 134 | | 176 | | 218 | 251 | | |
| 51 | | 93 | | 135 | | 177 | | 219 | 229 | | |
| 52 | | 94 | | 136 | | 178 | | 220 | 255 | | |
| 53 | | 95 | | 137 | | 179 | | 221 | 254 | | |
| 54 | | 96 | | 138 | | 180 | | 222 | 228 | | |
| 55 | | 97 | | 139 | | 181 | | 190 | 223 | 240 | |
| 56 | | 98 | | 140 | | 182 | | 234 | 224 | 186 | |
| 57 | | 99 | | 141 | | 183 | | 189 | 225 | 184 | |
| 58 | | 100 | | 142 | | 184 | | 164 | 226 | 231 | |
| 59 | | 101 | | 143 | | 185 | | 252 | 227 | 188 | |
| 60 | | 102 | | 144 | | 186 | | 238 | 228 | 198 | |
| 61 | | 103 | | 145 | | 187 | | 226 | 229 | 196 | |
| 62 | | 104 | | 146 | | 188 | | | | | |
| 63 | | 105 | | 147 | | 189 | | | | | |
| 64 | | 106 | | 148 | | 190 | | | | | |
| 65 | | 107 | | 149 | | 191 | | | | | |
| 66 | | 108 | | 150 | | 192 | | 227 | | | |
| 67 | | 109 | | 151 | | 193 | | 83① | | | |
| 68 | ④ | 110 | ④ | 152 | ④ | 194 | | 83② | | | |
| 69 | | 111 | | 153 | | 195 | | 83③ | | | |
| 70 | | 112 | | 154 | | 196 | | 121 | | | |
| 71 | | 113 | | 155 | | 197 | | 237 | | | |
| 72 | | 114 | | 156 | | 198 | | 82① | | | |
| 73 | | 115 | | 157 | | 199 | | 82② | | | |
| 74 | | 116 | | 158 | | 200 | | 82③ | | | |
| 75 | | 117 | | 159 | | 201 | | 96 | | | |
| 76 | | 118 | | 160 | | 202 | | 244 | | | |
| 77 | | 119 | | 161 | | 203 | | 232 | | | |
| 78 | | 120 | | 162 | | 204 | | 84① | | | |
| 79 | | 121 | | 163 | | 205 | | 84② | | | |
| 80 | | 122 | | 164 | | 206 | | 84③ | | | |
| 81 | | 123 | | 165 | | 207 | | 84④ | | | |
| 82 | | 124 | | 166 | | 208 | | 84⑤ | | | |
| 83 | | 125 | | 167 | | 209 | | 84⑥ | | | |
| 84 | | 126 | | 168 | | 210 | | 84⑦ | | | |
| 85 | | 127 | | 169 | | 211 | | 241 | | | |
| 86 | | 128 | | 170 | | 212 | | 243 | | | |
| 87 | | 129 | | 171 | | 213 | | 181 | | | |
| 88 | | 130 | | 172 | | 214 | | 253 | | | |
| 89 | | 131 | | 173 | | 215 | | 242 | | | |
| 90 | | 132 | | 174 | | 216 | | 235 | | | |
| 91 | | 133 | | 175 | | 217 | | 194 | | | |

第3表 竜王3号墳・長類出土位置一覧表

註)

(1)既に報告済みの二ッ塚1号墳も本墳と同様に赤坂台に所在する古墳ではあるが、やはり国分期末の土師器を石室内よりかなりの量を出土している。(『山梨県中央道報文』北口摩郡双葉町地内1 1978)。今回の竜王3号墳で初めて国分期のものと思われる人骨を検出したわけだが、閉塞石内からも国分期の土師器が検出されたことは、明らかに平安時代に石室内に遺体が埋葬され閉塞石が積み直されているのである。赤坂台周辺では平安時代に古墳を埋葬の場として二次的に使用する風習があったものと思われる。

(2)本墳をはじめ山梨県内の終末期古墳では2、3の例を除いて土器類の出土量が極めて少ない。地元の話から推測すると、近世から現代にかけてかなり石室内から持ち出されているようだが、それだけの理由で土器が少ないかどうか疑問である。

(3)国分期の土師器の編年については末木 健氏のものに添った。(末木 健 1976『山梨県中央道報文』須玉町地内)

(4)鉄錆の形式分類については後藤守一の研究に従った。(後藤守一 1939『上古時代鉄錆の年代研究』人類学雑誌54—4)。

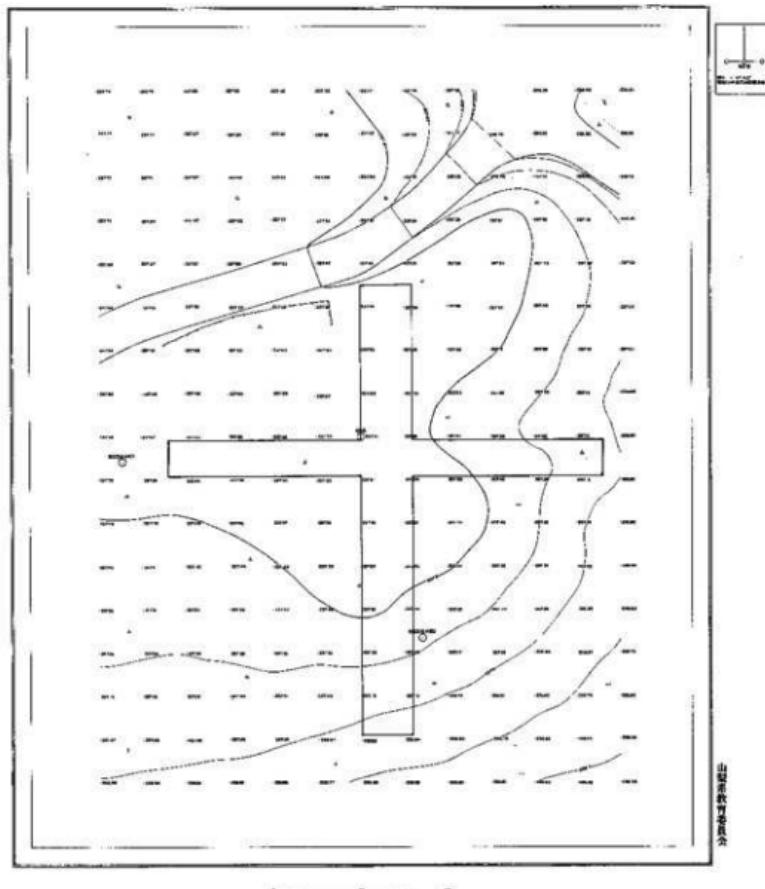
第3節 ふたん塚古墳（竜王1号墳）

中巨摩郡竜王町新町字二ッ塚1884、1885番地に所在したこの古墳は昭和45年頃、宅地造成業者によって削平され、調査時点では全く見る影もなかった。中央道通過が決定して以来、手を入れるものも無く、ただゴミ捨て場として廃物が投棄され続けた為に、調査を開始した時には、雑草とゴミに埋もれ続いた。

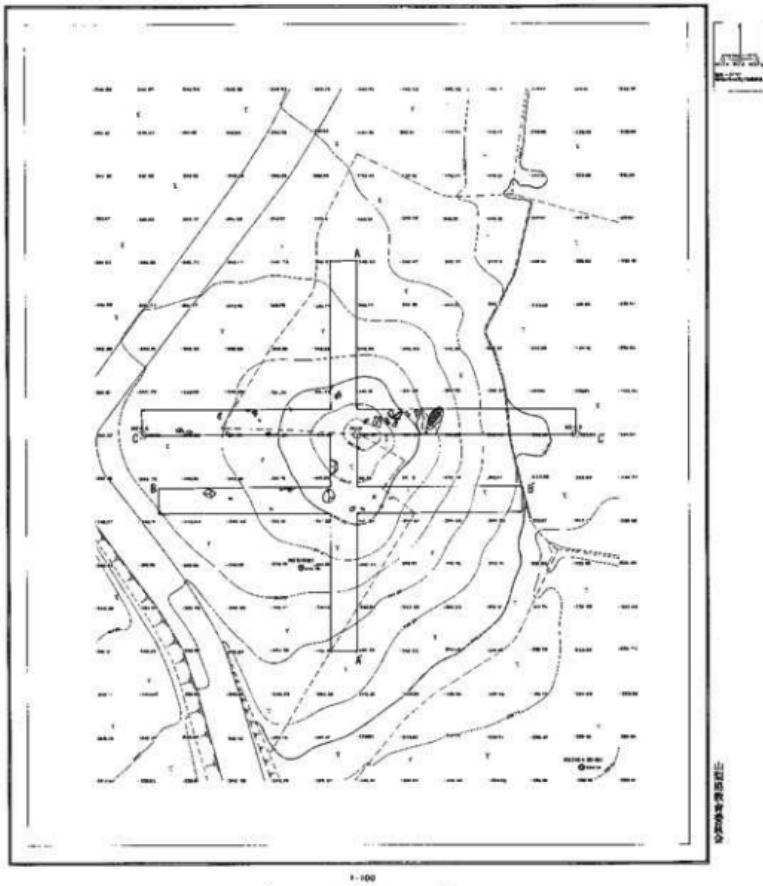
この古墳が存在したと思われる地点にN O 6杭を設定し、東西に長さ22m、巾2m、南北に26m、巾3mのトレンチを設定して約30cm振り下げたが、他の古墳でも見られたような墳丘の周囲をめぐる根切溝等も発見されず、地表に敷かれた砂利の下は直ぐに地山層となってしまっている。このことから造成は墳丘を平にしたものではなく、削平して、東側の低い部分に埋め立てたことが分った。今日ふたん塚の姿を知る資料は少なく、唯一の墳丘実測は日本道路公团が昭和44年に実施した航空測量図による他はない。その図によれば、墳丘は円墳で、基底25m、高さ3mを計り、二ッ塚1号墳より若干大きいことが分っている。地元の人々の話によれば、二ッ塚より大きい横穴式石室が南に開口した状態で残っていたそうである。又、遺物も、削平時には金環等が表面採取されたこともあるらしいが、今はその所在を知ることができない。

第4節 ニッ塚2号墳（富士塚）

北巨摩郡双葉町竜地字ニッ塚2638番地に所在する。中央道S T A N o 316の北東側、標高341.87mがこの塚の墳頂高である。ニッ塚支群の最高所にあり、基底部径25m、地山よりの高



第30図 ふたん塚現況平面図



第31図 ニッ攫 2号 填現況平面図

さ約 1.2m を計る。

この古墳には A～C の 3 本のトレンチをキの字に設定した。A トレンチは南北に 23m、巾 1.5m、B トレンチは No.4 桁で A トレンチに直交させ、長さ 25m、C トレンチは B トレンチより南へ 3m のところで東西に設定した。

結果は古墳ではなく、富士塚と考えられる盛土であって、土層は黒色の旧表土上に赤土と黒色土を交互に積み重ねたもので、内部施設等は一切認められていない。ただ旧地表土に薄い炭火物の層があり、草を燃やしてから盛土したことが推定できる。遺物は七輪質土器の細片が 5～6 片出土したが器形は不明である。恐らくこの塚は富士塚の様なものであろう。墳頂に立つと、正面の富士山の姿は言うにおよばず、甲府盆地を眼下にした眺望は絶景である。

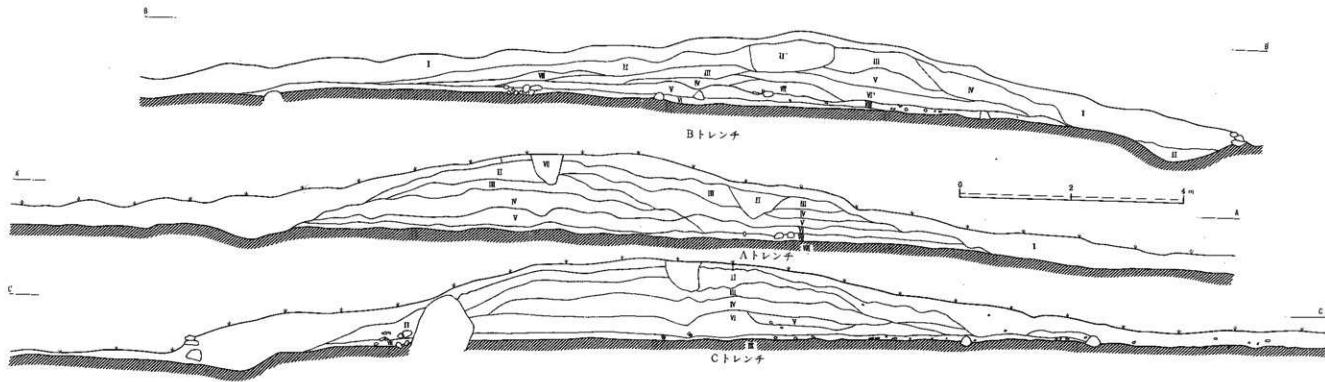
墳丘盛土は赤色土と黒色（褐色）土を交りに積んだ良好な状態を呈している。墳丘内の遺構は無く、C トレンチ東側に巨石が存在するが、地山中の巨石をそのまま埋め込んだものと思われる。

第3章 考察

第1節 石室構造について

前回報告した二ツ塚 1 号墳、双葉 2 号墳¹⁾の石室構造で、玄室と羨道の空間的な区画の認められない石室と、閉塞石、羨門と関係した石室正面の石積み構造を、山梨県北西部から諏訪地方にかけての横穴式石室の特徴として認識し、これを群馬県下に分布する台形、長方形区画の前庭部を保有する古墳からの影響であろうと推定した。今回調査の行なわれた竜王 2、3 号墳も、この形態の石室を保有する古墳であったが若干の相違が認められた。

竜王 2 号墳は狭長な梯形の横穴式石室を備え、不整形な台形区画を持つ前庭部が構築されていた。石室には側壁の変化、仕切石等の石室を区画する意図の認められる施設は構築されず、床には一面に同様の状態で敷石が施されていた。さらに玄室、羨道の区画対象である天井部は崩壊、流出して現存せず、空間的な区画は認められなかった。石室正面の石積みは竜王 2 号墳にも設置されていたが、形状、意識の上で特異な状態を呈していた。それは、本墳の前庭部が不安定な台形状を呈し、上底部の幅が羨門幅と著しい違いをみせず、羨門の作りも雑なものであり、さらに石室側壁、羨門、前庭部区画と移行する石室石積みが、無理なく移行する状態で構築されており、羨門、閉塞石を結んだラインでの石積みを設置する空間的な余裕が、羨門部分には存在せず、このために石室正面石積みを羨門部分に構築することができなかつたのである。したがって、本墳は前庭部区画の形状と羨門の不備によって、羨門から石室主軸に直交するラインの石積みは設置することはできず、さらに前方に広がる前庭部区画によって石積みが規制されてしまったようである。しかし、このような状況であるにもかかわらず、本墳にも石室正面石積みを構築しており、この遺構に対する根強い支持が感じられる。このように羨門



第32図 ニッ冢 2号 塗土層図

部分には石積みを構築することができないために、渓門、閉塞石との関係の上で形成されていた石積み遺構を、前庭部区画内に閉塞石だけ構成したのが本墳の特徴^⑩である。したがって石積みの設置場所が渓門部分から移動し、前庭部区画の中ほどまで前進して構築されていた。この状態は、渓門部分をすべて覆い隠す形状であり、さらに閉塞石が渓門の内側に一端を構築しているため、幅が1m85という大規模な構築物が形成されてしまっている。このような形状は他の部分にも影響を与えており、正面石積みの押えとして前庭部区画石もそれ相当の石積みと、頑強さが心要となったようである。このために側壁から通して前庭部区画石の上部にも石積みが行なわれているが、崩壊が著しく、この状態がどのような帰結を呈したかは不明である。遺存していた正面石積みは2段～3段が認められており、大略横口積みにした石材をほぼ垂直に近い状態で積み上げた外面形を呈し、外見的には整った状態に仕上げていた。

竜王3号墳は2号墳にくらべやや幅広であるが、石室内を区画する袖石等の認められない狭長な梯形プランを呈する横穴式石室を備えていた。ただ玄室部内を区画する仕切り石が設置され、奥壁に接する位置に棺座状の施設^⑪が構築されていた。仕切り石は横口を上に向けた細長い2板の石材と、これを側壁に固定させていた2個の石とで構成され、玄室床面より約35cmほど高く構築している。棺座部分は190cm×140cmのほぼ長方形を呈する空間で、仕切り石と奥壁の間には径20～30cmほどの石材を充満し、その上に厚く小礫を設置して形作っており、構築状態は良好であった。このような施設は玄室と渓道との区画を持つ場として意識され、区画されたものと考えられる。したがって竜王3号墳も玄室と渓道との区画を持たない横穴式石室として認めることができる。ただ左側壁の渓門から2個目の根石が倒置して設置されており、袖部分を意識しての設置である可能性もあるが、石室プランに側壁の突出等の変化が認められず、機能的には袖として認識することはできない。したがって袖であっても形式、簡略化した袖であって、石室内を区画する意図の袖とは性格を異にしている。

石室正面の石積みは渓門から主袖に直交するラインで構築されており、長野県岡谷市唐櫻石古墳と同様の形状を呈している。石積みは現存3段～4段が認められ、渓門石と接している部分には挙大の礫できき間を詰め、その左右には一抱えほどの比較的大形の石材を横口、小口積みを用いて、ほぼ垂直に近い状態で丁寧に積み上げていた。渓門は左右で異なるが、左渓門は小口積みにして2段の石積みが遺存している。右渓門の根石は小口積みではあるが、倒置して設置し、石室正面には広口面を向けており、渓門の形状を整える意識^⑫が窺える。閉塞石は後世の平安時代に積み替えが行なわれていることが確認されている。したがって、旧状は現状とは違った形状であった可能性がある。しかし渓門、閉塞石を結んだラインが、それ以上の長さで横方向に展開し、石積みが行なわれていることも事実であり、敷石も閉塞石の下には敷かれていおらず、敷石で規制された区画内に閉塞石が設置されたものと思われ、旧来と同じ部分に閉塞石を構築して、正面石積みラインを渓門と共に形作っていたものと考えられる。この正面石

積みがどの程度の高さを持ち、どのような形状で積まれていたか興味深いが、現状では推定は不可能である。竪王3号墳には敷石は施こされていなかったが、前庭部と認められる空間が石室正面に認められた。それは石室正面石積み前方のテラス状部分であるが、この部分には大形の石材2個を並べた遺構が存在している。この石例は石室左側壁を延長した位置に設置されており、石室遺構との関係が深い構築物と考えられる。さらにこの石列と右側壁の延長部分の間は凹地になっており、さらに前方へ延びて行くことを、凹地に充満していた閉塞の崩壊した石材と思われるものを除去した結果、認めることが可能であった。この溝状凹地は延長部分が石室内であり、石列という付属施設が左側に設置されている状態から、墓道的な役割を持つ遺構として把握され、その区画のために設置された石列であったものと考えられる。また、墓道的な遺構が前庭部と思われるテラス状の空間を切るように構築されていることは、両者の意識が一体となって形成され、このような帰結を出現させたものと考えられる。この墓道区画と考えられる石列は、本県の篠地・1号墳¹⁶、長野県唐櫃石古墳¹⁷にも類例が存在しており、中でも唐櫃石古墳の状態と酷似している。したがって、閉塞石、正面石積み等の崩壊した石材とは性格を異にするものであり、意識的な構築物として把握できるであろう。さらに前庭部前方左側に石材が分布することが確認されたが、そのすぐわきからは周囲に掘られた根切り溝があり、これが本墳に伴う遺構であるかは不明であった。

2. このように今回調査された竪王2、3号墳も、前年度調査した二ツ塚1号墳、从葉2号墳と同様の形態、特徴を有する横穴式石室を備えた古墳であった。山梨県北西部から諏訪地方にかけて、この一年間で古墳の調査が行なわれたものは管見にあがったものではなく、類似を求めることができない。しかし前庭部区画を保有する古墳群の調査報告を知ることができた。

この古墳群は群馬県に県境を接する埼玉県児玉郡美里村と児玉町にまたがる塙本山古墳群¹⁸と、秩父山地にそって南下した東松山市西原古墳群¹⁹で、6世紀終末から8世紀初頭の年代に比定されている。塙本山古墳群では29基の横穴式石室を備えた古墳が調査報告されており、特徴のある石室形態が確認されている。それは石室プランと特徴的な石積みによって構築された石室で、報告書は模様積みという表現を用いている。石室側壁根石が一抱えほどの石材の他は幅10~20cm、厚さ5cm内外の偏平な河原石を小口積みにして積み上げ、さらに人形の石材をレベルを合わせるように所々に配して側壁、奥壁を構成している。奥壁には一枚石のものや、大形の石材を数枚積み上げたものもあるが、側壁はすべて模様積みで構築されていた。このような特徴的な構造を有する古墳²⁰は、群馬県富岡市周辺から児玉郡に分布することが指摘されている。石室プランは大部分の石室が、胴張り状の玄室と玄室より短い狭道部が構築され、区画部分には細長い玄門柱を倒置して設置した形状の石室で、他には僅に胴張り状を早する玄室と、石室幅を狭めた狭道で構成される向袖型石室のものに大別される。報告者はこの形態差を時間差によるものと推定している。さらに遺存していた狭門部分は大形の石材を用いて積み上げており、丁寧な構築であったことが窺える。本古墳群の石室前方にはすべて形状は異なるが

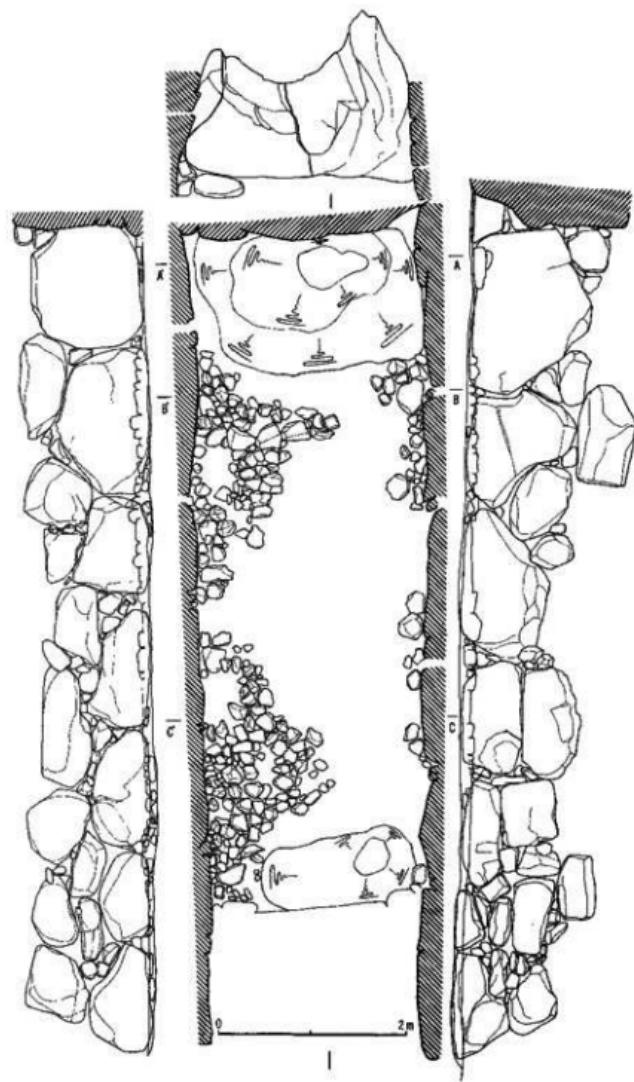
前庭部が構築されていた。基本的には台形状の平面プランを呈するように区画されているようであるが、狭門から石室主軸に直交するラインだけに区画石を配し、石積みしたものや、台形に立体的な石積みを行なったもの、区画名だけのもの等の別がある。このような前庭部を構成するものとして、狭門から横に聞く石室正面に石積みが施されていることが確認された。構築方法は石室側壁と同様の手法で築かれ、狭門とラインを合わせて丁寧に積み上げているようである。塙本山古墳群の調査例内では閉塞石の形状が図示されておらず不明³であり、狭門との関係でどのような状態を呈していたかは判断できない。ただし、11号古墳狭門部分に残存部が図示されており、これによれば狭門間を結んだラインの内側に積み上げ、狭門正面の面に合わせた石積み状態であったものと思われる。したがって前庭部に関係した遺構として狭門、閉塞石、正面石積みが存在し、構築されていることは明白である。この塙本山古墳群と同様の石室、前庭部を持つ古墳が同県東松山市西原古墳群である。西原古墳群例も胴張りの著しい石室プランを呈し、側壁は模様積みに近似した石積に状態を示している。前庭部は石積み状態を示している。前庭部は狭門から横方向に聞く、直線的なラインで区画、石積みされており、全体的には台形プランを持つ前庭部が構築されていたものと思われるが、論述されておらず不明である。しかし西原古墳群にも石室正面の石積みが狭門、前庭と共に構築されていたことは、間違いないことであり、石室正面石積みの性格が前庭部の発生、発達と共に形成されたことが暗示されているようである。

さて、二ッ塙1号墳に認められた前庭部区画と関連した石室正面石積み遺構が、埼玉県塙本山⁴、西原古墳群において確認することができた。さらに前庭部を狭門から聞くラインの石積みだけで表現した竜王3号墳、唐櫃石占墳の類例も、塙本山古墳群の中に存在が認められる⁵。このように石室の形態差はあるものの、構築物としての前庭部は存在が指摘でき、石室正面は同様の状態を呈していたものと考えられる。前庭部に付属する石室正面を有する古墳は埼玉県西部にも確認することが可能となり、現状では秩父山地、八ヶ岳を介した周辺地域の古墳の特徴として、さらに石室の構造体の一部として認識することができる。群馬県では台形プランの前庭部は7世紀中頃からはじまるものとされているが、塙本山古墳群では典型的な台形プランの前庭部は、7世紀前半の中頃に比定された1号墳に認められ、さらに6世紀終末に位置づけられた15号墳には正面石積みが確認されており、前庭部の構築は7世紀前半と推定して良いと思われる。このような現状は、いまだ前庭部に対する認識が確定していない状態を示すものと思われる。この状態を踏えて石室正面石積みに対して考えてみたい。

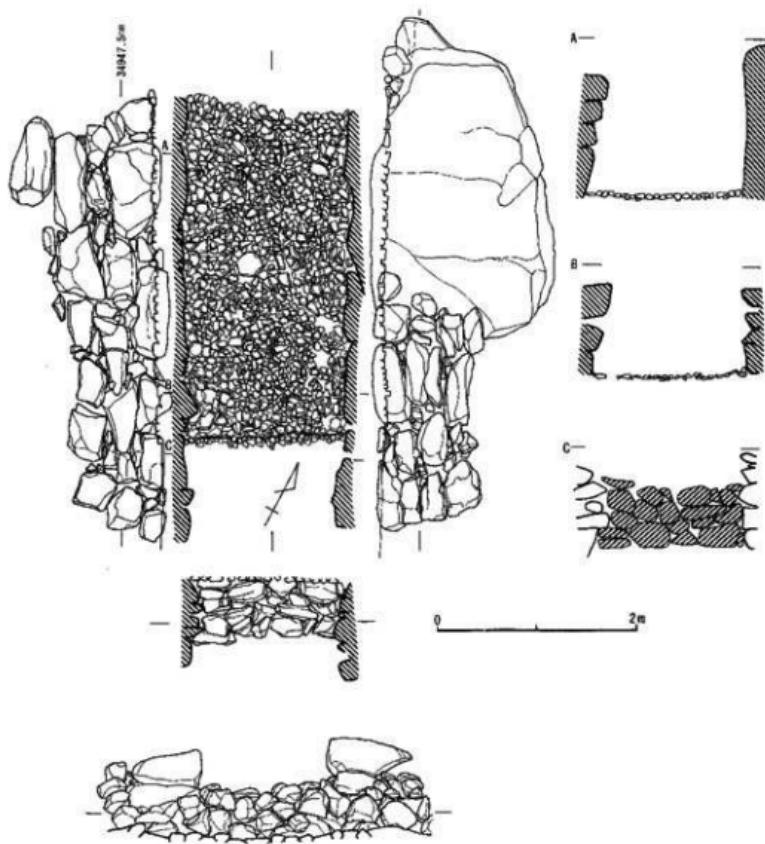
まず第一に、石室正面石積み遺構の存在する石室には、裏込め石を用いる形態のものが大部分を占めることである。さらにこの裏込め石は控え積みを施さない形態の構築方法を用いるものが大半を占める。裏込め石の用途は主に側壁の崩壊を防止し、より頑強に石室を保護し、さらに側壁構築のさいの構築基盤となりうるものである。しかしこの裏込め石を覆う埴丘の存在する側壁、奥壁に対しては問題はないが、狭門部分の裏込め石を露出させることは崩壊に通

じる。したがって渢門部分には一般的な裏込め石と異なった技術が必要になる。それは渢門部分をより頑強に、より大規模に構築して、渢門だけで崩壊を防ぐ強度をもたせ、裏込め石を使用しないで構築する方法か、崩壊を早めることを承知のうえで渢門部分には裏込め石を設置しない方法、あるいは側壁状の石積みを石室主軸に直交するラインで、渢門部分に築く、かである。技術的にはどの形態の構築方法でも、応用がきく技術段階まで達していると考えられる。さらに渢門という石室を構成する一構築物の出現は、どのような背景によったものであるのか。石室正面を構成する遺構として追求していく必要があると思われる。このように技術的にも正面石積みを構築する必要性があるわけではなく、何んらかの要因が介在した結果であり、本地域に横穴式石室、及び渢門の構築方法が伝播した段階で、どのような形状を示すか興味深い。しかし本地域では、前庭部に伴う石室正面の石積みを構築することによって、裏込め石の崩壊が回避されており、これは横穴式石室構築以前より行なわれていた集前祭の場としての空間が石室前方に求められ、さらに石室の入口という意識が、これと融合した結果、前庭部、石室正面石積みが発達したものと考えられる。これと共に閉塞石が単なる葬道の封鎖目的だけでなく、石室正面を構成する一構築物として、外見的に整った状態で渢門部分に積み上げられたのであろう。ただ塚本山古墳群には渢道、渢門部分には裏込め石を施こさない状態の石室が構築³⁸されており、これは前庭部を構成する一構築物としての性格しか、正面石積みに求めることができない。このような形状は、裏込め石との関係が離脱した形態のものであり、前庭部が意識、構築物、機能の上で独立した結果として認識することができる。このように諏訪地方から山梨県北西部に認められた石室正面石積みは、前庭部の一部として確認され、さらにこれを、誇張した形状³⁹で表かれている。前庭部も機能が定着し、用途が独立することによって、裏込め石のおさえとしての性格が薄れてしまい、石室正面として装飾的な形状も伴えたものに変化していったようである。

さて、玄室、葬道の空間的区画の認められない石室の類例は、確認することはできなかったが、石室正面の石積みの類例と、用途を確認することができ、さらに時間差の存在することも明らかになった。諏訪地方から山梨県北西部に点在する古墳群の中で、今回調査された竜王2、3号墳は、二ツ塚1号墳より後出のものと思われる。それは二ツ塚1号墳が、山梨県北西部で調査された古墳の中では、整備、縮少化すると考えられている横穴式古墳の中でも、石材、規模共に大形であり、さらに前庭部正面石積みが、まだ未発達の段階と思われ、前庭区画と、裏込め石基底部の押え的な状態であり、形状的にも整理されていない。これに対して竜王3号墳は石材の大きさ等は大差が認められないが、石室全体が小形になり、正面石積みが丁寧に構築されている。両者の石室正面には精粗の差があり、竜王3号墳のほうが形態的により整備された石室状態を示す。竜王3号墳、二ツ塚1号墳、と異なる前庭部の認められた竜王2号墳は、前庭区画が不安定な台形プランを呈するから、群馬、埼玉両県の前庭部形態の影響により形成されたものと考えられる。不安定な前庭部を形成した結果として、石室正面が渢門を覆うよう



第33図 ニッ塚1号墳石室展開図



第34図 双葉2号墳石室展開図

な状態で構築されており、より装飾性の強い形態を呈している。これは本地域（諏訪～山梨北西部）では石室正面石積み造構に対して、強い支持があったことを暗示していると思われる。さらに石室は二ッ塚1号墳、竜王3号墳に比べ、幅が減少し、石材もより小形で、直方体に近い石材を選んで用いているようであった。

したがって山梨県北西部では二ッ塚1号墳→竜王3号墳→竜王2号墳、双葉2号墳という変遷が石室、前庭部形態よりたどることが可能である。前回の報告で前庭部の形態から二ッ塚1号墳を7世紀中葉後半に推定した。だが、出土遺物の推定年代と約半世紀の時間差が生じる結果となってしまった。塚本山古墳群第15号墳では、正面石積みが確認されているが6世紀終末に比定されており、二ッ塚1号墳の前庭部も、より出現時期に近い形態のものと考えられるところから、前回の推定年代を撤回し、出土遺物と同様の年代に比定することが、より妥当性があると思われる。したがって、竜王3号墳は7世紀中頃、2号墳は7世紀後半に位置づけられよう。

塚本山、西原古墳群例より、竜王3号墳、唐櫛石古墳で認められた石室正面の石積みが、前庭部に伴う構築物であることが明らかになった。これと関係して前庭部の出現を本地方の特徴的な裏込め石との関連で推定したが、類例が少ないため、多くの誤認があると思われる。大方の御批判と他地域に関する御教示をいただけたら幸いである。最後になってしまったが、本稿を草するにあたり、山本茂樹氏より多大な後援をいただいた。記して感謝の意を表したい。

（伊藤 恒彦）

註

- (1) 末木 健編（1978）『山梨県中央道埋蔵文化財包蔵地発掘調査報告書—北巨摩郡双葉町地内1—』山梨県教育委員会。
- (2) 本墳の羨門は狭く、左右の羨門で構築方法が異なり、両羨門を結ぶラインは石室主軸に直交せず、斜めのラインを呈しており、形狀が整っていない。
- (3) このような状態は閉塞石としてとらえることも可能であるが、意識的に羨門部分以外の場所まで閉塞石を積み上げていることから、閉塞石が石室正面を飾るものに変化し、石室正面石積みと同様の効果を表現したものと思われる。
- (4) このような施設も群馬方面からの影響であろう。
- (5) これは石室正面に広口を向けており、正面からの視点に最も良好な面を向けて、構築していることが窺える。
- (6) 山梨県教育委員会、山梨県遺跡調査団（1974）『国分寺地1号墳—官町群集墳の調査—』
- (7) 宮坂光昭他（1976）『唐櫛石古墳、姥ヶ懐古墳—長野県岡谷市唐櫛石古墳（赤彩横穴式石室墳）及び姥ヶ懐古墳発掘調査報告—』長野県岡谷市教育委員会。
- (8) 竜王県教育委員会（1977）『関越自動車道関係埋蔵文化財発掘調査報告VI—塚本山古墳群—』

- (9) 金井琢良・、渡辺久生（1976）「西原古墳群一東松山上唐子西原古墳群発掘調査報告書」考古学資料刊行会。
- (10) 他に墳丘構造も特徴的であり、ほぼ3段階に分けて構築したことが指摘されている。
- (11) 報告書は炭還部すべてを封鎖構造とする簡略形としている。
- (12) 墳本山古墳群内の1、7、13、21、26号墳等。
- (13) 墳本山5、10、11、15、17、24、27、30号墳等。
- (14) 写真よりの判断であるが、10、13、24、25、26号墳等がこれに該当する。
- (15) 外面的には装飾的な意図もあったと思われ、実際には墳丘流出防止に役立ったものと思われる。

第2節 出土遺物について

昨年の二ツ塚1号墳と双葉2号墳について、今年は4基の古墳又は古墳と推定された富士塚の調査を行ない、そのうち竜王2、3号墳から重要な副葬品や、人骨等を得た。しかし、調査着手時には、この2基ともすでに盗掘されていたことによって遺物の良好な状態は期待されず、むしろ石室、墳丘形態の調査のみ実施するんだといった心構でいた。それが3号墳の調査が進展するにつれ、予想以上の遺物量に調査員一同が驚いてしまった。更に良いことには、石室、墳丘の構築も県下では特異であることが調査者にとって幸した。後者については、すでにその考察が伊藤恒彦によって示されているので、ここでは遺物について述べておきたい。

竜王2号墳の出土土器類の大半が須恵器の豪で、これは前庭部周辺から多量に出土している。墓前祭の遺品であるかもしれない。この他に、石室内より長頸壺、土師器の手握土器、杯等が出土しているが、石室内に散乱しておりまとまりはない。このうち時期の明確なものは土師器杯片で、胎上がもろく整形痕も明瞭ではないが、7世紀後半代における。須恵器杯は高台付杯で、8世紀前半代における、伴出する杯蓋も同時期のものと見て大過ないであろう。同墳出土の馬具飾金具は銅地金張の逸品で、長野県佐久市東一本柳占墳出土（会法13号）の同類品よりは文様が簡略化されることからも7世紀代の所産と考えてよからう。この一群は总数32点あるが、石室南側の西壁寄りに集中して遺存しており、細片等も検出されていないことから、石室外に持ち出された数は少量であろう。木葉文の施こされているものは7点で、このうち杏葉は三段に区切られ木葉文が上から1、3、3で並んでいる。又円形飾金具は木葉文を十字に配して花弁文を現わしている。又蛇尾状金具は10個のうち4個に文様が彫られ、それぞれ中央に1個づつ配される。この様な遺物から考へて竜王2号墳の使用年代は7世紀中頃から8世紀前半といえる。

竜王3号墳について見るならば、遺物説明の項でも述べられているように、土器群は大きく2群に分かれるが、入口部のものや奥壁寄出土の土師器は、平安時代に属する土器で約10世紀後半～11世紀前半における新らしいもので、古墳築造時のものは前庭部出土の杯である。これ

は7世紀中葉より新らしくないものと考えている。須恵器の大部分は蓋であるが、第22図2、7は台付長頸瓶の体部と脚部だと考えているが、7は底の体部の可能性も考えられる。2点とも台付長頸瓶、もしくは台付直口壺と考えると、その年代は7世紀前半である。

玉類は大きく四群に分けられ、棺床部には管玉や土製練玉の大型のもの（A群）仕切石前のガラス玉（B群）石室中央のC群は上製練玉の小型のもの、石室南側のD群はガラス玉の一群に分けられる。このA～D群が追葬と直接関係があるとすれば埋葬は4回認められるが、鉄製品の分布が石室中央東側に偏在していることからも、4回の埋葬は考えられないであろう。

馬具飾金具は鉄地金銅張製で雄大なスケールを感じさせる。これらも7世紀中頃の所産として良いものである。

遺物のこの様な概要から古墳の年代をさぐると、竜王2号墳は7世紀中葉～後半頃、3号墳は7世紀前半～中葉代に考えられる。

以上、簡単ではあるが、遺物の略年代を求めて大方の御批判を得たい。

（末木 健）

（註）

参考文献

世界考古学大系3、平凡社S50. 調査I、大阪府教育委員会報告書28、

長野県考古学会誌13 S43.

第3節 竜王3号墳出土人骨について

信州大学医学部 西沢 寿晃

本古墳出土の人骨は、玄室の羨道に近い位置に埋葬されたもの（A号人骨と呼称）、玄室の奥部の人骨群（B号人骨群）に区別される。いずれも腐朽の程度が進歩し、完全骨は残らない。全身骨格中、もっとも長大な四肢骨を多く遺存するが、ほとんどが骨の上下両端の海綿質の脆弱な部分を消失している。

以下、骨の形質を残す主な部位について記載する。

A号人骨（第20図、図中の番号と人骨番号は共通）

① 頭蓋骨の左側部分、第3回特に脳頭蓋の部分が比較的完形を保っている。顎面頭蓋、頭蓋底部（左右側頭骨の錐体は残る）、下顎骨等の殆どを欠失している。全体的に色暈土壤の洗脱浸透により、赤褐色に着色され、また同時に灰黒色の斑状にも残る。破碎された断面に見られる海綿質は黄白色を呈し、骨質も割合堅硬であるが、骨表面は剥落が激しく粗糙である。左岩上弓が僅かに残るが、その突出度は明確でない。後頭骨の外後頭隆起や、上頸線の発達は中等度である。頭蓋冠縫合の癒着程度を見ると、矢状縫合では外板に癒着は認められず、内板ではほぼ消失している。矢状縫合は泉門部のみであるが、外板は癒着、内板は消失している。

人字縫合は全面的に離開する。鱗縫合も外れている。頭骨最大長は18.2cmと推測される。

なお、頭頂骨の一部に密着して、口縫部を含む土器片が認められた。

② 右大腿骨の骨体下部で、膝窩平面の部分である。骨稜の外側唇がやや強い一稜を形成するのがみられる。

③ 左大腿骨の骨体のはば中央部（現長約15.0cm）である。骨質は頑丈で、大腿骨稜の発達も強度である。骨体中央位と見做される位置での横断面形は、前後径27.0mm、横径22.5mm、周径80.0mm、示数は111.1となり、柱状性は中等度を示す。

④ 右大腿骨の骨体で上下端を欠き、中央部で折損する。（現長25.0cm）遠位関節面は②と接合するものであろう。一部残る骨稜の発達はや、弱い。骨体中央位の横断面形は、前後径24.0mm、横径28.0mm、周径82.0mmで示数は85.7となり、偏平の程度が強い。

⑤ 右脛骨の下半部であるが、遠位関節面を欠く（現長16.5cm）前縫を含め各縫はや、鈍で骨体は伸直である。

⑥ 左脛骨であるが、多くの部分が断片状となる。營養孔を含む骨体上部（現長約10.0cm）を残すのみである。右側同様に各縫は鈍で、膝窩筋線の発達も比較的弱い。

⑦ 上腕骨の形態に似るが、骨体は細かく縦裂され、僅かに15cmの長さに接合できるのみである。厚い緻密質を有するが、表面は極度に剥落が進み粗朶となる。

⑧ 左尺骨の骨体上半部である。（現長約10.0cm）頑丈であるが、骨間縫の発達は強くない。断面形は殆んど正三角形をなす。

B号人骨群（第20図 奥壁人骨）

⑨ 頭蓋骨の小片と共に下顎骨の骨体と、これに横立した状態の歯が検出されている。下顎骨は以後のクリーニングの際、既に骨粉状となって落ったが、左下顎角の部分が残存する。大臼歯が脱落した後の歯槽が開放されているが、生前に換るものか不明である。歯槽部は肥厚し、骨体も強壯である。前歯はすべて残るが、殆んどが歯頸線で剝離する。これは歯根の未形成の時期による場合も勘考される。臼歯も歯冠の斑駁質部分のみが残る。全歯に咬耗は全く認められない。

⑩ 右上腕骨の骨体下半部（現長約16.0cm）である。比較的太く頑丈な形で、骨体はほぼ伸直、捻軸も弱い。中央部での横断面形は円型に近い。三角筋粗面の発達は弱く、橈骨神経溝は浅い。

⑪ 左上腕骨であり、⑩と同一部位で左右両側のものであろう（現長約9.8cm）。

- ⑪ 桡骨の骨体中央部（現長約7.0cm）であるか左右不詳。
- ⑫ 前腕骨の一部とみられるが、正確な部位は判明しない。
- ⑬ 右大脛骨の骨体中央部（現長約21.5cm）。後面を殆んど欠く。骨体中央位の横径は24.0mmでや、偏平な横断面形が推測できる。形態は強壮である。
- ⑭ 右（？）大腿骨の骨体中央部（現長15.5cm）。
- ⑮ 左大腿骨の骨体上半部（現長約14.0cm）。大腿骨稜の発達も弱く、緻密質も薄い。全体的に繊細な感があり、若年令の骨と見做される。⑯と同一個体であろう。
- ⑯ 右大腿骨の骨体下半部（現長約20.0cm）で下端と前面の一部を欠く。大腿骨稜の膝側唇が下部に至り、や、強い一稜を作るが、発達は弱い。しかし、骨質、形態ともに強大である。
- ⑰ 右大腿骨で、出土人骨中でもっとも長大に遺存したものである。上端は小転子下より、下端は膝窩平面の下部まで残り、骨体にも破損はない（現長30.7cm）。可成り頑強な形態である。しかし脛筋粗面や恥骨筋線等の筋附着部位の粗糙は弱い。大腿骨稜もさほど顕著でない。下部に至り、膝側唇がや、強い一稜を作る。小転子基底より約6cmの位置に、外側上方より内側へ斜行する幅約1cmほどの浅い溝が見受けられる。それは後面のみに限られ、骨質の変化も見られる。土圧による押印と思われる。骨体横断面形の各計測値は次の通りである。骨体上部—前後径27.3mm、横径31.4mm、周径 9.0mm、横断示数86.6、骨体中央部—前後径30.0mm、横径28.6mm、周径 8.9mm、横断示数 104.9、骨体上部の偏平度は中等度、中央部は弱度である。
- ⑱ 左大腿骨骨体と大脛骨頭の一部が残り、他に細片が多い。骨体（現長約18.0cm）は中央辺で、や、細い華奢な形をなす。大腿骨稜も脈・頭側の顕著でない平滑な直線状である。骨体中央部の前後径22.0mm、横径25.0mm、横断示数は88.0となる。
- ⑲ 肋骨（左右不詳）の骨体部（現長約 8.5cm）。比較的頑強な骨質であるが、前縁や骨間縁の形成は鈍である。
- ⑳ 右脛骨々体上部である。營養孔を含む後面を主として残す（現長約12.0cm）。膝窩筋線の発達は、僅かに痕跡としてみられる程度に弱い。
- ㉑ 右脛骨々体中央部（現長約19.5cm）。前縁と内外側の平坦面を残すのみである。前縁は直線上で、一部残る骨間縁は鈍である。
- ㉒ 左脛骨々体の下半部（現長約15.0cm）。各縁とも弱い形成を示し、華奢な感がある。
- ㉓ 肋骨（左右不詳）の骨体部。主として前縁の部分のみが残る。（現長約11.5cm）

その他、⑩、⑪、⑫は下肢（大腿骨、脛骨）の一部であるが、確定できない。

また、⑬に密接して、左足骨中の第5中足骨の基端部が認められる。

以上、列記した骨の他に、第1、2図中の点線の位置にそれぞれの形状の骨が確認できたが、その部位や形質を記録するに至らなかった。

A号人骨は玄室の羨道近くで、頭位を東南方にして横臥した1個体の埋葬遺骸と見做される。頭蓋骨の下部に密接して上腕骨、橈骨が交差して置かれ、四肢骨もばく近位置で連続性を示す。部分的には離散する骨も見られるが、他の箇所の骨も全く消失しており、腐蝕に伴なう移動か、若しくは後世の何らかの所為を勘考させる。

遺骸の年令、性別等を表わす形質的特徴は殆んど欠失してしまったが、頭蓋冠の縫合の癒合程度や、四肢骨の形状等の僅かな部位から、壯年の男性人骨と推定される。

B号人骨群は、骨格中もっとも強大な大腿骨や脛骨等が不規則に集積された状態である。各骨の出土に上下間層の差違は殆どなく密着し、方向性もない。所謂晒骨となった時期での集骨とみられるが、周囲に点在する頭蓋骨の小片を含めた数点の歯の遺存や、玄室内に散見される骨片の所在などに問題が残る。



出土頭蓋骨（左側面）



出土人骨
(右より、33, 28, 16, 29)

個体数や年令構成の判定には不完全な資料であるが、各骨群中の大腿骨を分類すると、最少2個体及至3個体の存在が推定され、また若年期・壯年期の年令差を示す個体の混在が指摘できる。

(西 洋)

おわりに

昨年について中央道にかかる赤坂台二ツ塚古墳群の調査を実施して多くの成果を得た。墳丘、石室の説明については伊藤氏の見解にも示されたごとく、石室構造からすれば昨年の二ツ塚1号墳よりやや新しい構築物と考えられる。特に前庭部について、新知見を得たことが特筆すべきことの様に考えている。

まず竜王2号墳の側壁が連続して台形状の前庭部の側壁へと移って構築されている点であり、これは本県の過去の調査例からは知ることのできなかったものであろう。又竜王3号墳は玄室内の間仕切石が、奥壁と平行して設置されるもので、昭和53年度調査の双葉町無名墳（きつね塚）と同様の施設をもち、県下ではこの2例しか見当らない。この古墳群の特徴が、はたして本県の後期古墳文化に於てどの様な位置を占めるかは、今後の調査にゆだねられている。

又、遺物の点からも、この竜王2、3号墳は研究史上重要な位置が与えられよう。2号墳の馬具飾金具は銅地金張りの逸品で、長野県佐久市東一本柳古墳の出土品につぐものであろう。この他に手握の小形土器が数個出土している。口縁直下に小穴が2個穿たれているものである。竜王3号墳からは、人骨が数体分出土している。ただ奥壁寄りのものは古墳時代と想定してよからうが、閉塞石内側のものは、平安期の土器を伴出していることからも新らしいと考えられる。遺物内容は豊富であるが、追葬等の回数は土類の分布からしても3回、即ち古墳築造後4回の埋葬が行なわれたことが推定される。

今後は、墳丘、石室、副葬品の研究を通じて、県内他地域や近県の状況をふまえつつ、本古墳群の性格を追究してゆきたいと考えている。先学諸氏の御批判、御教授を願う次第である。

なお、調査に参加された地元作業員及び補助員の方々に御礼を申し上げると同時に、双葉町教育委員会、日本道路公団甲府工事事務所の方々の協力に感謝申し上げます。 (末 木)





1. 龍王 2 号墳發掘前現況



2. 龍王 2 号墳全景

竜王3号墳より
2号墳を見る



実測風景



清掃作業



1. 2号墳石室全景



2. 石室正面



1. 東側壁



2. 西側壁



1. 奥壁



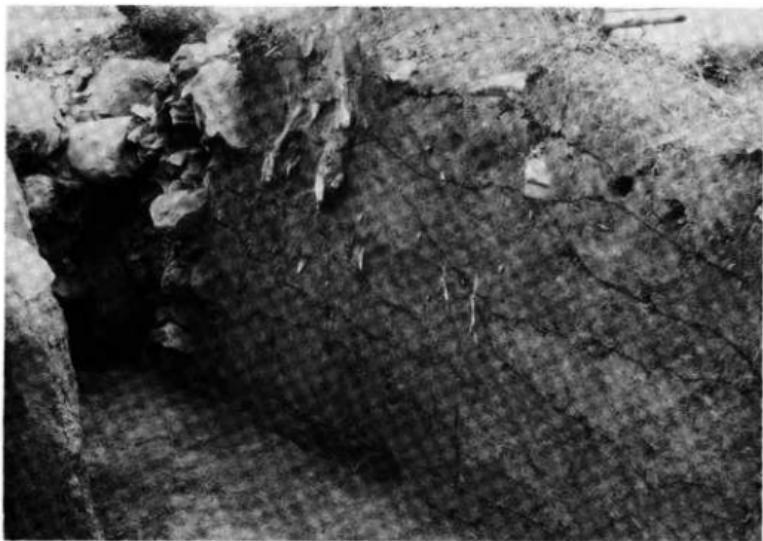
2. 開塞石内側正面



1. 奥壁セクション



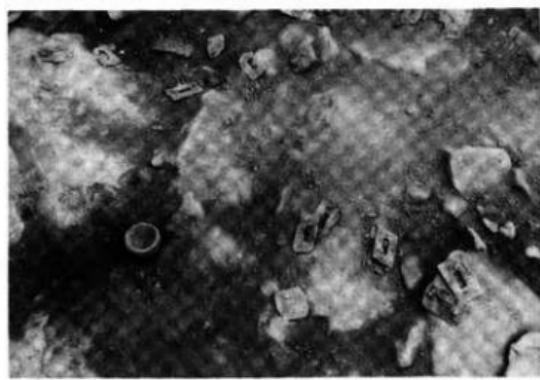
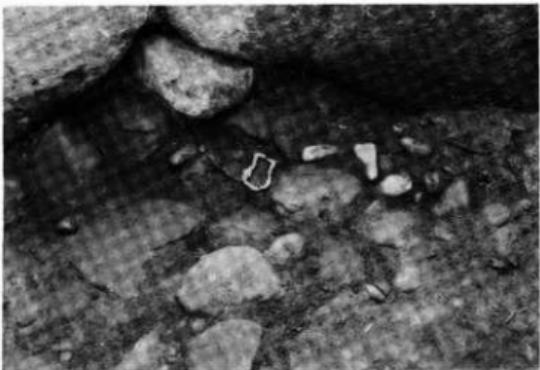
2. 東側セクション

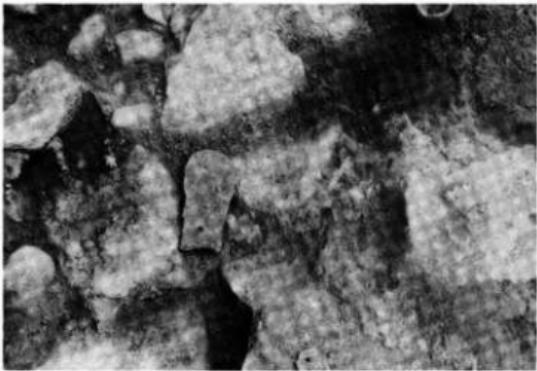


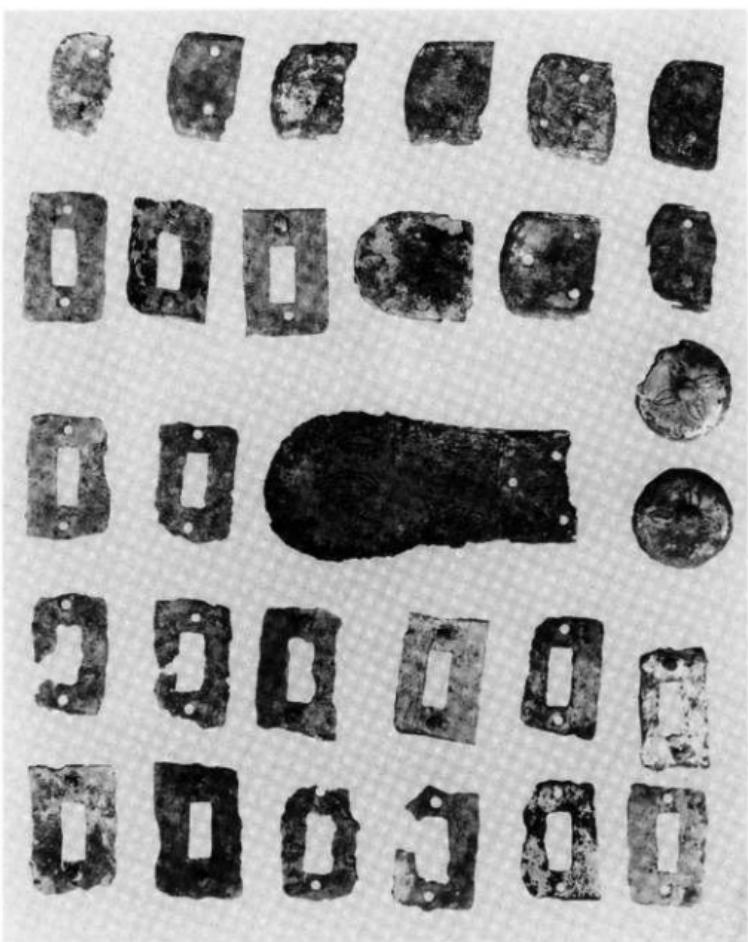
1. 西側セクション

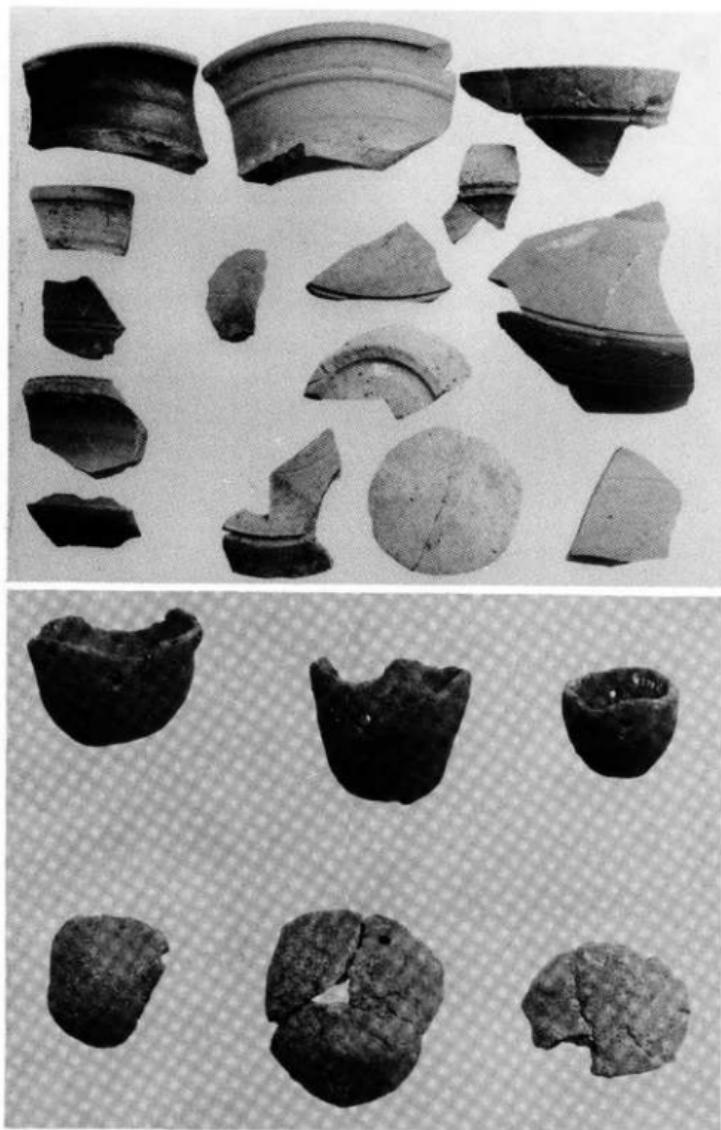


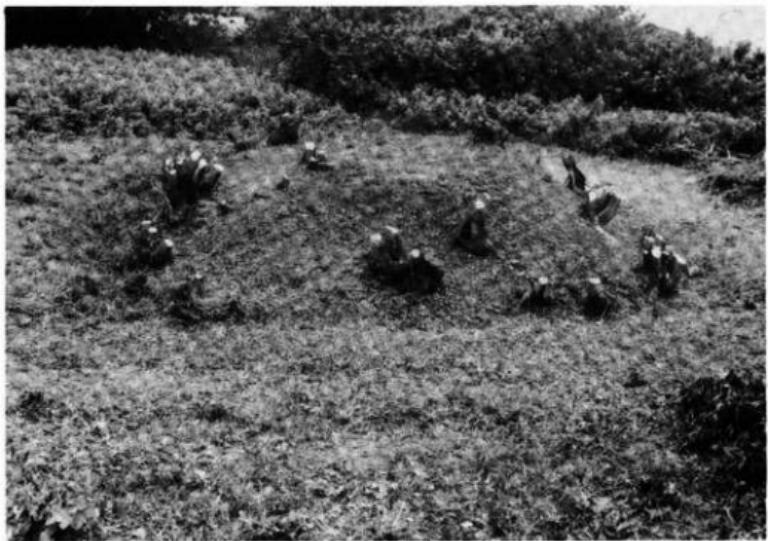
2. 裹込石の状態











1. 竜王3号墳調査前現況



2. 竜王3号墳全景



1. 調査風景



2. 石室全景



1. 奥壁正面



2. 閉塞石内側正面



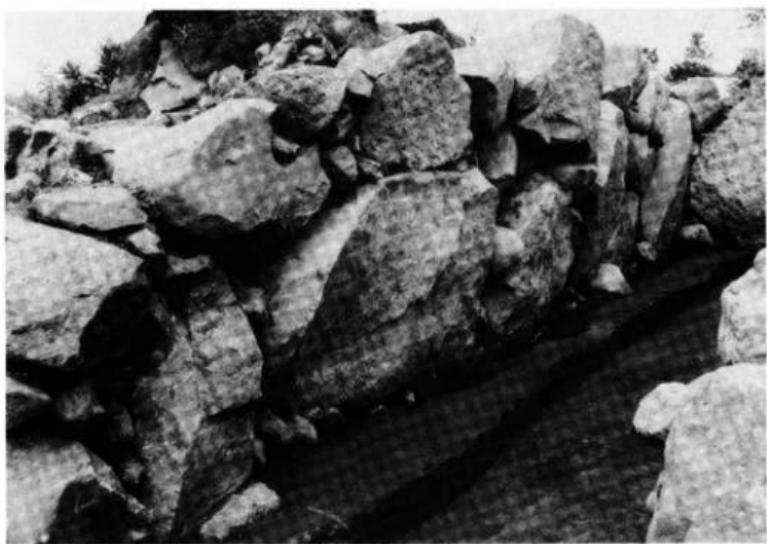
1. 棺 床



2. 石室閉塞石除去



1. 東側壁



2. 西側壁



1. 東側壁裏込状態



2. 西側セクション



發掘作業風景



與壁
人骨尖削



入口部
人骨清掃

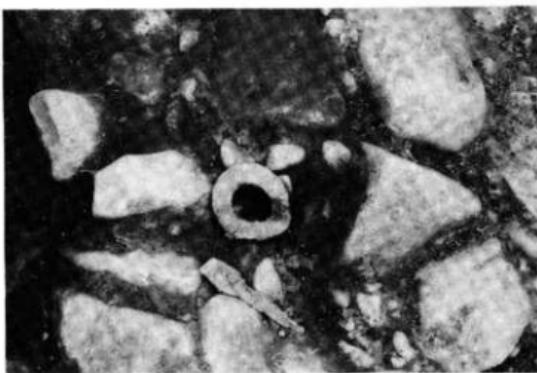
信州大学
西沢教授
人骨取上



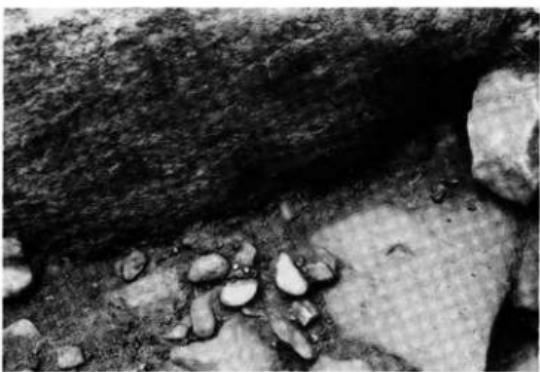
入口部頭骨
出土状態



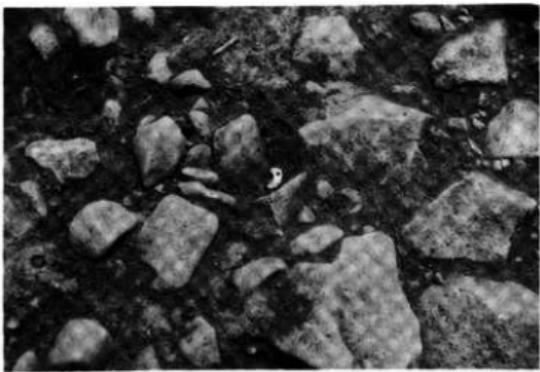
同人骨出土
状態

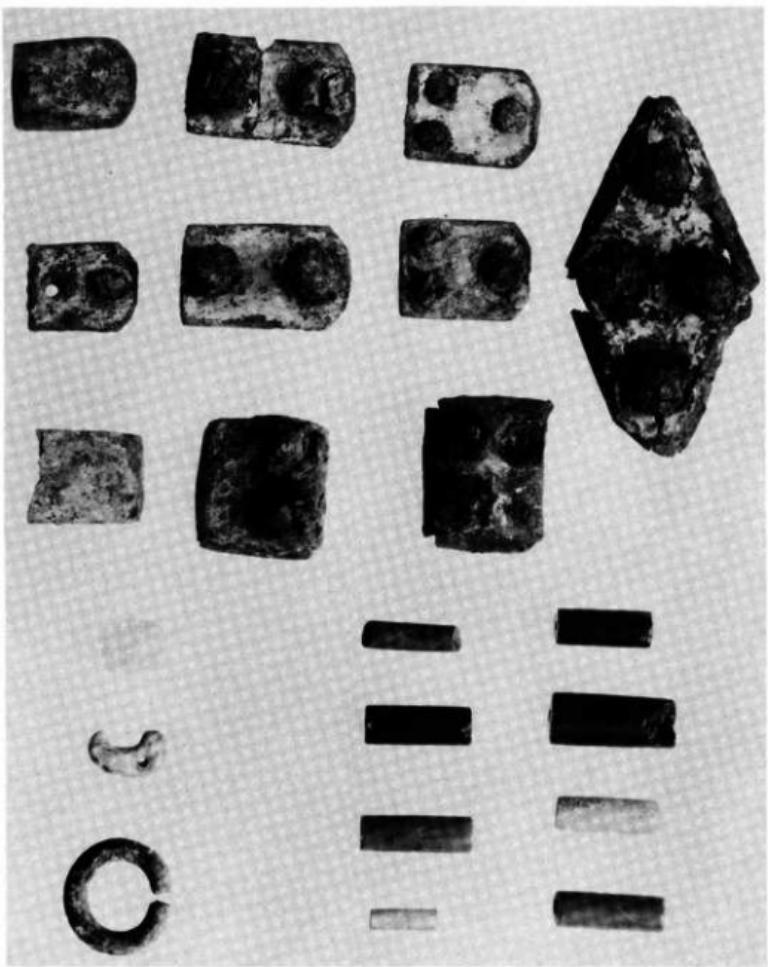


玉出土狀態
(B)



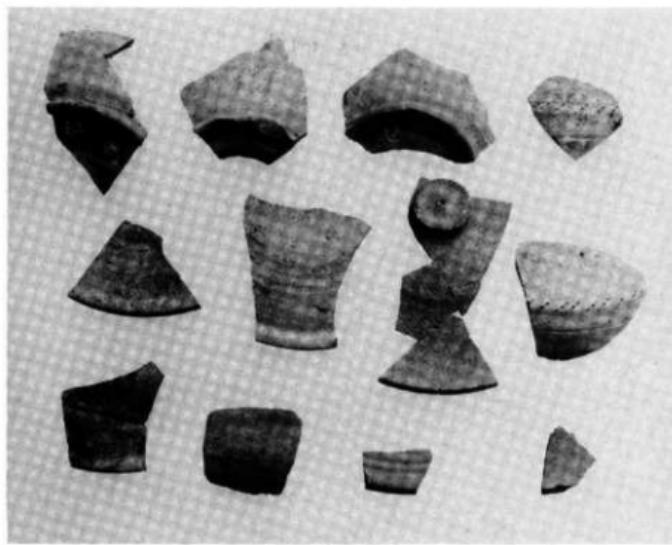
玉出土狀態
(A)



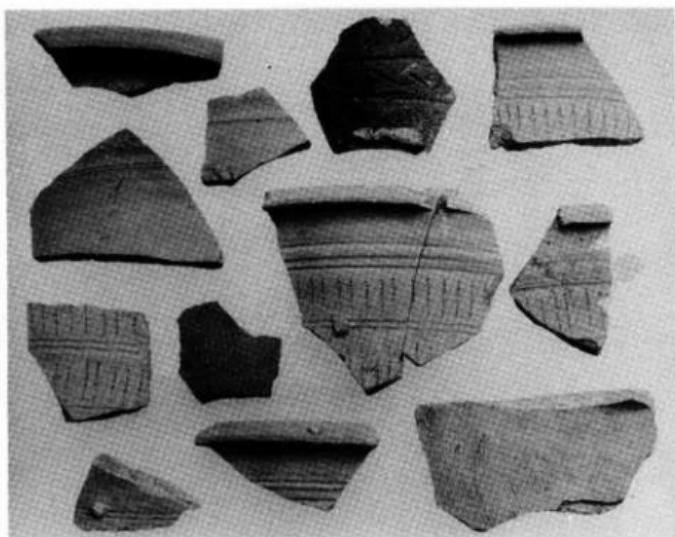




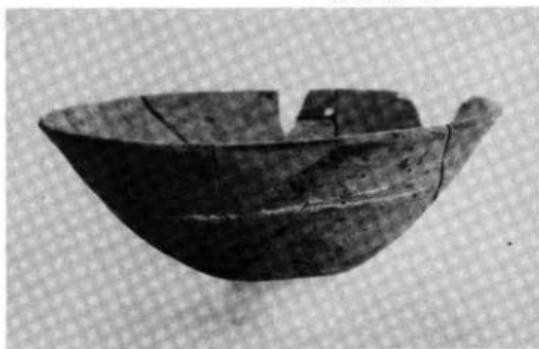
1. 鐵 製 品



2. 須 惠 器



1. 繢 惠 器



2. 土 師 器





1. 発掘調査前現況



2. トレンチ設定



1. Aトレンチ北側土層



2. Bトレンチ東側土層



1. Cトレンチ東側石組



2. 調査風景

昭和54年3月25日印刷
昭和54年3月31日発行

山梨県中央道埋蔵文化財
包蔵地発掘調査報告書

—北巨摩郡羽葉町地内2—
—中巨摩郡竜王町地内—

発行所 山梨県教育委員会
日本道路公团東京第二建設局
印刷所 鮎峠南堂印刷所

